第2章

語る

証言の部

東日本大震災の大津波がもたらした深い悲しみを抱えながら、それでも人々は語る。

あの日、この町で何が起こり、人々はどう動き、何を思ったのか。ルポ**「私たちのまちが消えた」**は、被災した山田・大沢・織笠・船越・田の浜・大浦の各地区で町民の声を拾い集め、それぞれの「3・11」をドキュメンタリータッチで再現した。

「避難所で起きたこと」は、ピーク時に約850人が身を寄せ、医療現場にもなった山田南小学校避難所で何があったのかを、当時の学校長や避難所自治組織代表、医師の証言を交えて振り返る。

インタビュー**「古老たちは語る　三つの津波をくぐって」**では、東日本大震災とチリ地震（1960年）、昭和三陸地震（1933年）の三つの津波をくぐり抜けた80～90代の町の古老4組の体験談に耳を傾ける。

ルポ 私たちのまちが消えた 山田

焼け落ちた中心街「津波火災」がれきに着火、瞬く間に

八幡町で発生した火災（平成23年3月11日午後5時42分撮影）。
火災の左端に消防の放水が掛かっているのが見える。
まさに「焼け石に水」の状態だった。
写真左下の明かるみは長崎一丁目付近が火元の火災

全被災地で最大の延焼面積

火は、がれきに埋もれた道を大蛇のようにはい回り、町をなめ尽くした。津波に襲われた上に二つの大規模火災が発生し、焼け落ちた山田町の中心街、山田地区。延焼面積は東京ドーム3個半分以上に当たる約17ヘクタール（消防庁調べ）とされ、今回の津波が全国で誘発した火災の中で最大、最悪の被害を出した。

町の消防団員らは、折り重なるがれきに行く手を阻まれながら水利の確保に奔走。余震とさらなる津波の恐怖にさらされる中、巨大な火炎と格闘した。山際などに堆積したがれきに火の気が漂着し、瞬く間に燃え広がった「津波火災」――。都市防災の専門家は町を襲った火災をこう定義し、困難な状況の中で万策を尽くした消防関係者の活動を高く評価する。

山田町消防団第7分団は、町内で最も家屋が密集する八幡町や長崎など中心市街地を管轄する。あの日、団員の甲斐谷定貴さん(43)は経営する理髪店で勤務中に激しい揺れに襲われ、すぐに屯所に向かった。分団長とポンプ車に乗り込み、山田漁港の防潮堤で、津波に備えてほかの団員らと4カ所の水門を閉鎖した。

地震から30分以上を経た午後3時20分ごろ。団員で当時運送業の佐藤吉孝さん(54)が水門の上部を見ると水が噴き出ている。山田湾に注ぎ込む小河川の西川が、足元でみるみる水かさを増してきた。「もう、やばい」。全速力で走りながら後ろを振り返ると、津波が防潮堤を乗り越えるのが見えた。

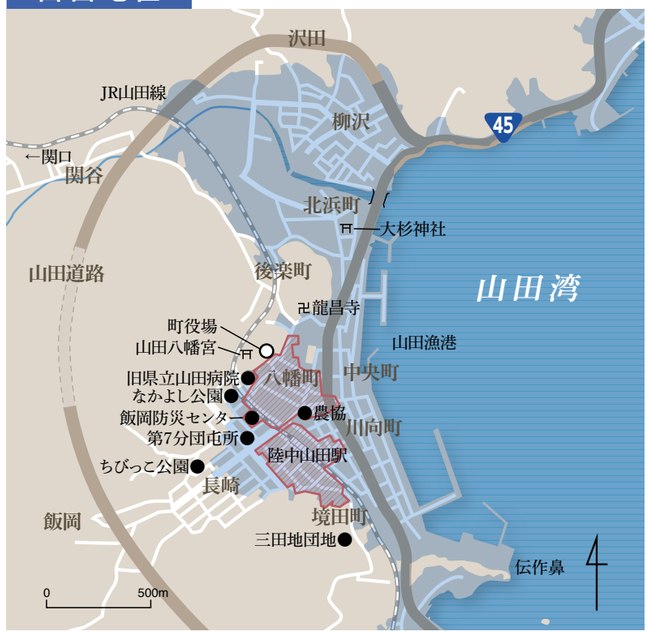
甲斐谷さんは分団長を自宅に送っていこうと、いったん戻った屯所から北に向かってポンプ車を走らせていた。農協の前に差し掛かったところで、逃げてきた佐藤さんと出会う。バックミラーには、がれきを巻き込みながら迫りくる濁流が写っていた。ポンプ車は進路を西に変えて、高台にある町役場の駐車場に避難。バーン。眼下でものすごい音を立てて、流されてきた家と家とがぶつかり合った。

埋もれた水利

「今度は火事の方で出ねえば駄目だあ」。甲斐谷さんが役場に隣接する八幡宮の境内から町を見下ろすと、旧県立山田病院に対面する八幡町の街区で煙が立ち上り始めた。津波が町中に押し寄せてからまだ10分も経っていない。初め蛇の舌のようにチロチロと燃えていた赤い火は、黒煙を上げながら見る間に勢いを増していく。ポンプ車はがれきに阻まれて動かせない。消火栓や防火水槽はことごとく埋もれてしまった。7分団員らは、浸水を免れた旧山田病院の看護師寮の敷地にある消火栓から取水することを思いつく。屯所の1階で腰の辺りまで残っていた水をかき分けてホースを担ぎ出し、つなげられるだけつないで、放水を始めた。出火から1時間近くが過ぎていた。

ポンプ車が使えず、消火栓単独の圧力では水の勢いが弱い。甲斐谷さんはホースを手に、降り出した雪に濡れてツルツルになったトタン屋根を滑りながら伝い、火元に近づくしかなかった。消火栓の水量は乏しく、

山田地区



※地図データは震災前のものです
※浸水範囲および延焼範囲、縮尺は目安です

は津波の浸水範囲
は火災の延焼範囲

水利が埋もれる中、懸命の消火活動に当たった消防団第7分団の佐藤吉孝さん（右）と甲斐谷定貴さん（第7分団屯所で）

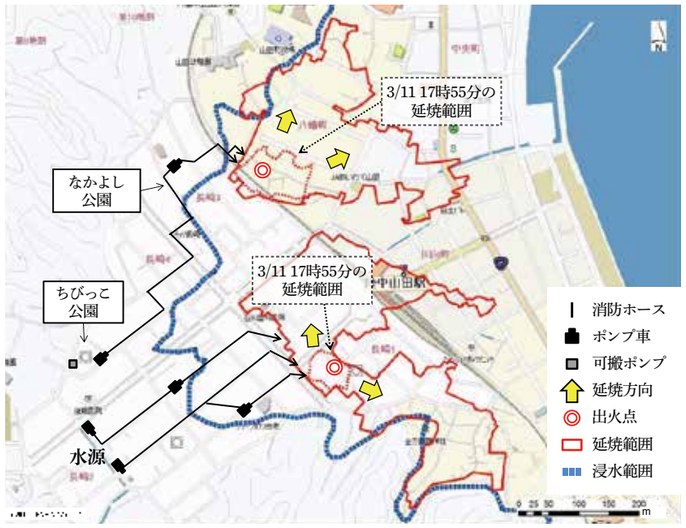
ほどなくして尽きた。

豊間根から応援部隊

苦境に駆け付けたのは、津波被害のなかった内陸の豊間根地区を管轄する三つの消防団（第11～13分団）だった。午後5時ごろ、山田消防署と第11分団のポンプ車などが火災現場に到着。海沿いの大沢地区にある消防署は地震の後、山間部の町総合運動場（同地区山谷）に消防と救急の車両を避難させ、さらに署から北に約7キロ離れた、無線設備のある町役場豊間根支所に移動していた。八幡町の火災発生を防災無線で傍受し、支所に集合していた11分団と共に、海岸を通る国道45号を避け、山間部の町道へ。田名部から関口、猿神、赤松を回り、避難してくる対向車とのすれ違いが路肩の残雪の影響で困難な中、1時間以上をかけて市街地に入ったのだった。

火元周辺はがれきが押し寄せていて容易に足を踏み込めない。消防署のポンプ車は火元から約130メートルの「なかよし公園」の防火水槽から取水し、7分団員と共に消火に当たったが、その水にも限りがあった。11分団は直線距離で400メートル以上離れた「ちびっこ公園」の周囲を流れる細い水路を探り当て、ポンプ車と可搬ポンプを配備。沢水をためて送り込んだ。

山田地区での消防活動



日本火災学会　2011年東日本大震災火災等報告書（完全版）から抜粋

二つの火災と攻防

同じころ、長崎一丁目付近でも火の手が上がっていた。11分団のすぐ後に現場に入った第12分団と、大沢地区の火災で第10分団を応援した後に合流した13分団が懸命の消火活動に当たった。水の枯渇を予期した7分団の甲斐谷さんは、火元から約400メートル離れた幅1メートルほどの用水路をせき止めて水源を確保。12、13分団のポンプ車が取水して、前線の消防署の水槽付ポンプ車や航空自衛隊山田分屯基地のポンプ車に供給した。

署員や消防団員の奮闘にもかかわらず、二つの火災は手の施しようがないほど、巨大化していった。消防署の佐藤正彦・消防司令補（当時）の手記によると、活動中は余震が頻繁に起き、大津波警報が出て何度も退避を余儀なくされた。「長い時は1時間も消火活動を中断せざるを得なかった。現場に戻るといったん弱まった火勢が再び勢いを増し、一進一退の攻防を繰り返した」。11分団の外舘嗣弘（つぐひろ）さん(57)＝現・分団長＝は「がれきのせいでホースが思うように展開できなかった。燃え広がるのをただ見ていたわけではないが、火点（火元）が遠く、どうしようもなかった」と振り返る。

長崎地区の火災を消すために利用した用水路。がれきに行く手を阻まれ、火元から遠くに水源を求めざるを得なかった

八幡町の火災で消防署のポンプ車が取水した「なかよし公園」の防火水槽

町役場前の火災。火は道路を埋めたがれきを伝って次々と隣の街区に燃え移った
（平成23年3月12日午前6時ごろ撮影）

現場では、バン、バンという爆発音が何度も響き渡り、プロパンガスボンベが火を噴き出しているのも目撃された。当時境田町在住の本宿一夫さんは、避難していた山田地区南部の通称「三田地団地」の高台から、火中で何本ものガスボンベが破裂して飛び上がるのを見たという。

がれきの道が「導火線」に

八幡町の火災は火元南側の飯岡防災センターを燃やした後、風向きが変わり、北と東の方角に魔手を伸ばしていく。甲斐谷さんは、がれきに覆われた道がまるで導火線のような役目を果たしたと証言する。「道路に何もなければ延焼しないが、がれきが流れてきていた。家が燃えたら隣の通りのがれきに燃え移り、それがまた隣の家や通りに、というようにどんどん燃え広がった。延焼を防ぐスペースが全くなかったんです」

7分団員は火の北側から放水を続け、一帯が燃えてしまうと、ホースを放棄し、さらに新しいホースを手に北側に回った。火炎は団員らを追い立て、にじり寄るように役場方面に迫ってきた。業を煮やした佐藤さんたちは、役場のすぐ下にある防火水槽をふさいだがれきを自力で取り除き、ポンプ車を横付けして水を吸い上げた。それでも足りず、最後は災害対策本部の許可を得て、役場隣接の中央コミュニティセンターの裏に立つ緊急飲料水貯水槽にホースを差し込んだ。水が尽きたのは、出火から8時間以上を経た12日午前0時ごろだ。万事休した。

「その時点でもう何もできず、役場のロビーで一晩中、町が燃えるのを見ていました」と佐藤さんは悔しがる。幸いなことに団員も、その家族も全員無事だったが、団員7人の家が焼けた。八幡町が火元の火災は発生からほぼ3日後の14日正午、長崎一丁目のそれは同日午後5時にようやく鎮火。住宅や商店など約490棟が灰燼（かいじん）に帰した。

町内で7件の津波火災

被災地で起きた火災をくまなく調査した廣井悠・東京大大学院准教授（都市防災）ら研究グループは、津波が原因で発生したと思われる火災

を「津波火災」と名付けた。7道県で159件が起き、うち29件が岩手県。山田町は山田地区が2件、田の浜地区が3件、織笠、大沢の両地区が各1件の計7件だった。

山田町中心部の火災は、東日本大震災の津波の被災地で最も延焼面積が大きい。消防庁消防研究センター（東京都調布市）の調べでは、17ヘクタールが焼け、大槌町大槌小付近の11・6ヘクタール、宮城県気仙沼市鹿折地区の11ヘクタールがこれに次ぐ。阪神・淡路大震災で延焼面積が最大だった神戸市長田区と須磨区をまたがる一帯の9・7ヘクタールをしのぐ。被災地全体でも67・1ヘクタールと、阪神・淡路の45・7ヘクタールを大きく上回る。

廣井准教授によると、津波火災は発生の原因や燃え広がり方などによっておおよそ四つに分類され、山田町の火災は田の浜の1件を除いて、大槌町や宮城県石巻市など背後に山が迫る三陸沿岸部で起きた火災に共通する「斜面がれき集積型」とみられる。メカニズムはこうだ。

津波が襲来し、倒壊した家屋や自動車、プロパンガスボンベ、灯油など大量の可燃物、危険物が山や高台のふもとに打ち寄せられ、集積する。そこに火の付いた家屋やがれきが漂着したり、燃料そのものから火が上がったりして、がれきなどに燃え移り、延焼範囲がどんどん拡大していく――。

散らばったがれきに延焼

山田地区の火災の場合、さらに特徴的な傾向があるという。廣井准教授が解説する。

「大槌や石巻の門脇地区は津波の勢いがかなり強かったので、がれきがほとんど山際に集積して、主にその一帯が燃えた。しかし、山田はそこまで津波の勢いが強くなく、水が押したり引いたりしているうちに、市街地全体に可燃物やがれきが散らばって、広範囲で『がれきクラスター（塊、集合体）』のようなものができた。がれきで埋まった道路は火防線の機能をせず、結果、非常に大きな延焼面積が発生してしまった」

町内のいずれの火災も出火原因は特定されていないが、大沢と田の浜、織笠では火の付いたがれきが漂流していたのが目撃されている。当時、山田地区の焼け跡には、容器弁の脱落したプロパンガスボンベや石油ストーブ、石油ファンヒーター、自動車などが焼損した状態で多数散見されており、これらが炎上、爆発を繰り返しながら延焼を助長したと考えられる。

プロパンガスボンベは地震や津波で転倒して配管が引き抜かれ、放出したガスに引火する恐れがある。また、火炎などで熱せられて内部の圧力が上がると、安全弁からガスが噴き出す仕組みだが、圧力の急上昇で安全弁の機能が追い付かない場合、破裂する危険性もあるという。通常の消火活動では、消防隊がボンベを取り外したり、放水して冷却を図ったりするが、今回の津波火災ではがれきに阻まれて不可能だった。災害時にガス漏れを防ぐには、「ガス放出防止型高圧ホース」などの安全機器をボンベに装着するのが効果的だ。地震などでボンベが倒れ、ホースが強く引っ張られると、接続部でガスの流れを遮断する。

発生から3日近くを経ても長崎地区でくすぶり続ける火災（3月14日午前11時3分撮影）。この6時間後にようやく鎮火した

津波に火災は付き物

不幸にして津波火災に遭遇したり、その危険性が予測されたりする場合、浸水区域内の建物にとどまらず、確実に区域外に避難しなければならない。津波避難ビルも津波火災に対しては決して安全とはいえない。「海に面した低層階に開口部があると、着火物が流れ込んで燃え上がる恐れがある。開口部を制限するなど津波火災対応の構造にすべきだ」（廣井准教授）。7分団の甲斐谷さんも「大きな地震があったら迷わずに高台へ。家の2階に逃げていったんは助かっても、その後の火災は付き物なので」と警戒を呼び掛ける。

津波火災の被害を最小限に抑えるには、どんな町づくりをしたらよいのか。「がれきを近づけないために町中にいくつも段差やフェンスを設けたり、燃えにくい木を植えて緩衝帯にしたりする対策が有効だ」と廣井准教授は指摘する。また、浸水していない地域や避難場所になる高台を延焼から守るために、効果的な道路整備や水利の配置も必要だという。

焼け跡の自家用車の中で見つかったガラスびん。高温でガラスが溶け、中に入っていた500円硬貨がめり込んでいる

官民協力して消火

山田地区の火災現場では、消防署と四つの分団が協力し合い、懸命の消火活動を行った。また、長崎の火災が迫ってきた飯岡の山林付近で、住民が風呂の残り湯などをまいて延焼を防いだことも報告されている。

廣井准教授は「消火栓や防火水槽ががれきにふさがれた状況で、自然水利をせき止めて消火を試みたことは、今後、津波火災の消防戦術に非常に能動的な示唆を与えてくれる。浸水地域外の消防団が山間部を迂回（うかい）して助けに来たことも評価できる。こうした常備消防や消防団、一般住民の取り組みは成果として普遍化し、後世に残すことが大切だ」と強調する。

当時12分団の副分団長だった深沢健悦（けんえつ）分団長（54）は「同じ山田町だし、出動するのは当たり前のこと」。一方で、「消防署も消防団も指揮系統がはっきりしていなかった。余力を持つ分団があり、無線がきちんと機能しているという前提で、指揮官が情報を集約して指示していれば、総力を挙げて対処できたのかなと思う」と反省を口にする。

東日本大震災の津波では、海岸から約400メートル離れた山田消防署も高さ3メートルまで浸水。消防団の屯所は13分団中、6カ所が被災した。当時消防司令補で消防署内にいた上沢隆署長は「消防の拠点は津波浸水地域でない場所に構えて備えねば。また、（多くが電動ポンプで送水する）消火栓と共に、停電の影響を受けない自然水利や防火水槽の適正な配置による整備も必要だ」と話す。消防署は県立山田病院などと共に山田地区飯岡の高台に移転することが決まっている。

豊間根地区から山道を迂回して駆け付けた消防団第12分団長の深沢健悦さん（右）と11分団長の外舘嗣弘さん

取材時期＝平成28年2月（佐藤さん・甲斐谷さん）、同3月（廣井さん・上沢さん）、同4月（外舘さん・深沢さん）

ルポ 私たちのまちが消えた 大沢

震災伝えた学校新聞

大沢小「海よ光れ」の挑戦

震災後初の「海よ光れ」で1面トップ記事を書いた大川海成君。津波で祖父母と伯父を亡くした

生きる意志と感謝込め

「負けるなよみがえれ　大沢の海よ光れ！」。震災からまだ1カ月余りしか経っていない平成23（2011）年4月19日、町立大沢小学校の手作りの学校新聞「海よ光れ」の第1面にこんな大見出しが躍った。肉親を津波で亡くした当時の卒業生や新6年生が力を合わせ、深い悲しみの中でも前向きに生きようとする意志や支援者への感謝の気持ちを紙面に込めた。

ゴーッ。「あ、地鳴り……」。子供たちがふと声を上げた直後だった。あの日、高台にある大沢小の児童118人は校舎内で強い揺れに襲われた。10分ほどで全員が校庭に避難。女児の多くが恐怖で泣いていた。学校新聞の指導者で、6年生1クラスの担任教諭だった佐藤はるみさん(55)は「低学年の子たちが不安になるから、泣くのはやめようね」となだめた。

気象庁によると、児童たちが校庭にいたころ、午後3時20分の山田町の気温は4・6度。曇りがちでひどく寒かった。佐藤さんが校庭に隣接する敷地の屋外トイレに児童らを誘導していた時、眼下の海を見ると「鎌首をもたげたような波が迫ってきた」。津波は防潮堤でいったん止まったかのように見えた。次の瞬間、「目の前が真っ茶色になるような」土煙が市街地を覆い、波にさらわれた家屋が西から東へどんどん流されていった。そばにいた6年生の女児がか細い声でつぶやいた。「私の家、どうなったかなあ」

この津波で大沢地区に住む約22

防潮堤を越え、大沢地区下条周辺を襲う大津波

30人のうち120人が犠牲になり、地区の全家屋の6割近くに及ぶ435戸が全壊。避難所となった大沢小の音楽室と図書室、多目的室は家を失った児童と家族、地域住民であふれ、ピーク時で約500人が身を寄せた。避難生活はその年の8月まで続いた。

子供たちを語り部に

佐藤さんが教室に6年生の児童を集め、「個人新聞」を作ろうと提案したのは津波からほぼ3日後のこと。大沢小は平成16（2004）年から当時の校長の指導で児童たちに新聞作りを奨励し、個人新聞の校内コンクールなどを開いている。学校新聞「海よ光れ」も同年に創刊した。

佐藤さんは「子供たちが被災した現実を乗り越え、将来、震災を後世に正しく伝える語り部になってくれればという願いがあった。今の気持ちをきちんと残しておきましょうと話しました」と振り返る。

児童や住民が避難した大沢小校庭で震災当時を振り返る佐藤はるみさん。校庭には仮設住宅が立つ

6年生児童29人のうち18人が応じ、それぞれの思いを託したA4判片面の新聞が1週間ほどで次々と出来上がってきた。

「現実」「明日」「Tsunami」といった新聞タイトルに、「怖かった」「信じられない」「夢であれば」などの大見出し。津波の恐怖や衝撃、町の混乱を手書きで生々しく記し、避難生活の苦労などもつづる。子供たちの率直な心情がこもった震災直後の貴重な記録であり、過酷な現実を何とか受け入れようと自らを鼓舞する様子が健気だ。

「個人新聞を見て、この子たちは書けると分かりました。避難所になっている学校で、共同生活を送る地域の皆さんへの配慮や、支援を頂いている方々への感謝の気持ちを忘れずにいてほしかった。そのことを子供たちなりの言葉で表現できるのは学校新聞だけだと思ったのです」

そう確信した佐藤さんは、3月23日に卒業式が終わると、学校新聞の制作を担当していた児童会旧執行部のメンバーを呼んで編集会議を開いた。卒業生へのはなむけの言葉を盛り込んで3月に発行するはずだった新聞は幻になったが、席上、「震災のショックは隠せない。でも、みんなが力を合わせれば大沢は大丈夫だっていうメッセージを送ろう」と伝えた。

悲しみの渦中で

当時の卒業生で旧執行部の大川海成君(16)＝宮古高校1年＝は、「(佐藤)はるみ先生が小学校に避難している人たちを元気づけるために何かできることはないかって問い掛けたところから始まった」と回想する。

このころ、大川君は悲しみの渦中にいた。織笠地区で海沿いの細浦に住んでいた母方の祖父が遺体で見つかったためだ。後に祖母と伯父の死も確認される。漁師の父と母、姉、双子の兄は無事だったが、大沢漁港のすぐそばにあった自宅は全壊した。「東に100メートルぐらい流されて、2階だけが残っていた。この先どうなるか不安でした」。一家は大沢小で3日間ほど過ごした後、親戚の家などに身を寄せ、今は大沢地区浜川目の仮設住宅で暮らす。

避難生活のかたわら新聞作りに携わったのは、主に卒業生の3人と新6年生の1人。始業式のある4月19日に発行し、その日のうちに全校児童と大沢小に避難していた人たち全員に配布された。

「海よ光れ」第78号。B4判両面の新聞で、大川君の記事が1面トップを飾った。手書きの大見出し「負けるなよみがえれ　大沢の海よ光れ！」が紙面上部の外枠を勢いよく突き破っている。記事では、子供たち同士で体を寄せ合って過ごしたあの日の夜のことを振り返り、新学期に際して「これまでとはちがった学校生活になりますが大沢小学校の児童は今までと変わらず笑顔で活発な子どもでいましょう」と呼び掛ける。さらに、子供たちが元気に仲よく助け合って暮らせば「きっと元の明るい町に戻れます！」と宣言する。

大沢の海よ、光れ

大川君は、学校新聞の名称の由来になっている全校児童出演の表現劇「海よ光れ」で主人公辰治郎の少年時代などを演じた。演劇は明治から昭和を通して大津波に翻弄されながらも力強く復興に立ち上がる大沢の漁民の姿を描き、昭和63(1988)年の初演以来、毎年秋の恒例行事になっている。大川君は5年生の時、近代になって底引き網による乱獲で荒れた山田の海の再生を願う「呼びかけ」の役を担った。舞台の中央に1人で立ち、「俺たちの海！　生き返れ！」と叫ぶと、全校児童が「海よ光れーっ！」と声を合わせて呼応する。感動的な場面だ。

大川君の念頭にはそのセリフがあ

震災から1カ月余りで発行された「海よ光れ」第78号。過酷な津波体験や全国からの支援に対する感謝の思いをつづる

―― 二つの「海よ光れ」――

学校新聞「海よ光れ」

平成16(2004)年、当時の渡邉真龍(わたなべしんりゅう)校長が高学年を対象に「個人新聞」の制作を指導したことで機運が高まり、同年9月に創刊。名称は全校児童から公募して最多だった、全校表現劇にちなむ「海よ光れ」に決まった。通常は月刊・B4判2ページの構成で、デザイン感覚あふれる手書きの見出しや校内の日常を丹念な取材ですくい上げた記事が特徴。平成28(2016)年度までに県小中学校新聞コンクール（県新聞教育研究協議会主催）で12年連続で最優秀賞を、全国小・中学校・PTA新聞コンクール（毎日新聞社主催）で最高賞の内閣総理大臣賞を4回、第2位の文部科学大臣賞を4回受賞するなど、内外で評価が高い。平成29(2017)年3月で通巻144号を迎えた。

全校表現劇「海よ光れ」

昭和63(1988)年に大沢小体育館で初演された。同小で毎年観劇教室を開いていた劇団「きたかぜ」（北上市）の代表藤原博行さんや、大沢の歴史・文化の伝承事業に取り組んだ郷土史家の鈴木弘一さん（いずれも故人）が中心となって脚本を執筆。漁師辰治郎とその孫正人との対話を軸に、明治、大正、昭和を通じて海と寄り添う大沢の人々の暮らしや漁労の文化、津波の脅威などを、方言のセリフや歌、巧みな身体表現で紹介する。児童らに地域文化のルーツを自覚させ、郷土愛を育む内容になっている。毎年秋の学習発表会で地域の人々を集めて披露されるが、震災の記憶の生々しい平成25(2013)年は6年生だけで演じた。以降、津波の場面の荒々しさを和らげるなどして発表を続けている。

大漁旗を背景に大沢小児童が熱演する全校表現劇「海よ光れ」（平成21年11月1日撮影）

った。「見出しはすぐに思い浮かんだ。地域の人たちも表現劇を見に来てくれるので、大沢のみんなが津波に遭ってもがんばるシーンを思い出してほしかった」という。佐藤さんは「自分たちの生活をめちゃめちゃにした海なんだけど、その海にさえ『よみがえれ』って言ってあげられるのはすごい」と感心する。

震災から時を経ても、友達同士の話題にあのころのことはほとんど上らない。ましてや肉親が犠牲になったという話は「してないし、できない」。でも、大人になったら話せるときが来るかもしれないとも思う。つらい気持ちは、小学1年生のころからやっている柔道の部活などスポーツに打ち込んで紛らわせた。震災直後は海を見る気もしなかったが、1年ほど経つと行けるようになった。確かに「時間は薬」だ。

大川君が、仮設住宅のそばでお気に入りという場所に案内してくれた。山田湾の湾口に近く、ぐるりと丸い形の湾全体と海沿いの町々を見渡せる堤防。大沢の海が赤い夕陽に照らされて、光っていた。

思いやりの大切さ伝え

新6年生だった福士悠太君(15)＝山田中学3年＝は1面の「思いやりをもって」と題するコラムを担当した。避難所になった大沢小は「家をなくしてしまった人達の家」「地域の人達に食べ物や救援物資を届ける大切な場所」だとして、「私達のためだけの学校ではない」「避難している人たちの気持ちになり行動しましょう」と配慮を呼び掛けた。

大沢地区浜川目の自宅が津波に流され、自身も避難者だった。家にいた父方の祖父母は逃げ出して助かり、両親と姉3人はそれぞれ町内の別の場所にいたが、翌日には再会できた。

福士悠太君は避難生活で感じたことを記事にした。避難所での経験をきっかけに柔道整復師を目指す

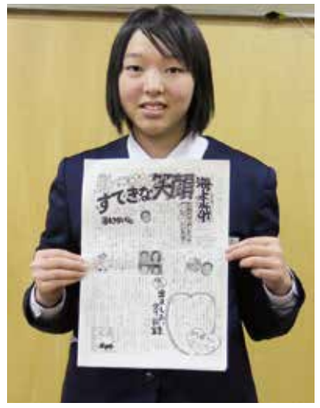
大沢小での暮らしの中で、福士君の視線は様々な人々に向けられていた。お年寄り、病者、一日中働く人、夜通し火の番をする人……。コラムで思いやりの大切さを強調したのは「みんなで助け合って生きていかねば」と痛感したからだ。避難所ではほかの子供たちと一緒にお年寄りにマッサージをして喜ばれた。

虎舞などの郷土芸能や祭りが盛んで、住民同士のつながりが濃密な大沢の町が壊滅したことに大きなショックを受けた。「怒りをどこにぶちまけたらいいか分からなかった」。中学に進むと柔道の選手として活躍し、平成26(2014)年夏の県中学校総合体育大会では66キロ級で第2位の好成績を収めた。

将来の夢は、骨折やねんざを治療する柔道整復師の国家資格を取得して、地元で開業すること。「山田の人たちを元気づけたい。避難所で肩もみをしたことがあったし、柔道を通じてやれることは何かと思ったら、それだった」と迷いがない。震災を経て人の心と体の痛みを知った少年は、傷ついた町民のために癒やしの技を身に付けようとしている。

津波に負けない

震災があった春以降、新6年生の児童会長として新聞作りを牽引したのが、古久保優希菜さん(15)＝山田中学3年生＝だ。自宅は山側の山谷(やまや)地区にあって被災を免れたが、ザーザーと音を立てて家々を流す津波を校庭から目撃し、母親が翌日午前に迎えに来るまで寒さと不安で震えた。



震災の年、児童会長として新聞制作を主導した古久保優希菜さん。記事執筆では客観性を重視した

5月11日発行の「海よ光れ」第79号。新学期を迎えて、1面トップに「元気な学校にしよう」の見出しと満開の桜のイラストを掲げ、各学年の児童代表に目標や抱負を聞いた。「津波に負けてくよくよしていられない。元気よく、生き生きとスタートを切ってほしい」との思いを込めた。

11月2日付の第85号では、児童会で進める「笑顔であいさつ」の運動が全校に広がってきていると手応えを記す。80％の児童が笑顔であいさつできているとの全校アンケートの結果を示し、笑顔が素敵な児童の写真を学年ごとに紹介している。

「震災から半年以上経って、子供たちの笑顔がたくさんあれば地域の人たちに元気が伝わると思いました。みんなが笑顔で生活していることがアンケートで分かったので、読者に知らせたかった」と古久保さん。

読む人を元気に

佐藤さんは「震災があった年の子たちのコンセプトはすごくはっきりしていて、とにかく『読む人を元気にしたい』と。それが合言葉のようになっていました」と思い起こす。

地域を盛り立てたいという願いと、取材した事実を裏付ける客観的データ、そして視覚に訴える写真。非常にバランスの取れた、理想的な新聞記事だといえる。

4ページ構成の同じ号では、見開き面に「学校　大沢の町　どんどん復興しているぞ！」の大見出しを打ち、大沢小と町で復旧・復興を実感できることベスト5の全校アンケートの結果を紹介している。大沢小は避難所が解消されて校庭や教室を自由に使えるようになったこと、町は津波で流失した店が再開したり、がれきが片付いたりしたことなどが上位にランクされた。震災から半年余りが過ぎ、当時の子供たちの前向きな気持ちがうかがい知れる。

記憶の風化が気がかり

学校新聞は震災後ほぼ1年間、児童会執行部のメンバーらが大沢地区に4カ所ある仮設住宅の約230戸を一軒一軒訪ね、配って歩いた。

古久保さんは今、震災の記憶の風化を心配している。「節目の毎年3月11日のころは話題になるけど、最近はニュースでもあまり見ないし、いろんな人が忘れかけてるのかな」。将来、母親になった時、わが子には「津波から逃げることも大切だけど、避難したら、率先して周りの人を手伝ってほしい」と教えるつもりだ。

子供たちは避難所になった学校で、他人を思いやり、助け合って生きる大切さを学んだ。全校表現劇「海よ光れ」で海に生き、幾多の大津波や戦争を乗り越えてたくましく立ち上がった大沢の人たちのように。

取材時期＝平成26年9月（佐藤さん・福士君）、同10月（大川君・古久保さん）

津波の後、市街地には大破した漁船や漁具、家屋がひしめいた（平成23年3月21日撮影）。中央奥に見える黒い瓦屋根は曹洞宗南陽寺。大沢小はさらに山側にある

ルポ 私たちのまちが消えた 織笠

「催すように」支援した人々
絆と結の町で

広範囲にわたってがれきが積み重なった織笠の町中
（平成23年3月19日午後0時5分撮影）

懸命に火災消火、炊き出し

ささやかな暮らしが営々と続いてきた織笠川流域の小さな漁師町は、津波で一瞬にして崩れ落ちた。人口約2800人のうち、100人以上が犠牲になった織笠地区。消防団員たちは津波火災の現場で懸命の消火活動に当たり、浸水しなかった山間部の住民らは、避難所が厳しい運営を強いられる中、いち早く物心両面から被災者を支えた。絆と結（ゆい）の精神が息づくこの町で、衝き動かされ「催すように」救助や支援に奔走した人々の軌跡をたどった。

あの日、尋常ではない揺れに驚いた消防団第4分団長の昆定夫さん(62)は、ポンプ車のサイレンを鳴らしながら団員と共に織笠漁港に急行、北から南に順番に五つの水門を閉めていった。最後に織笠川河口から約300メートル離れた屯所の前の水門のハンドルを手で回して閉め、一服つけようとポケットの中のたばこに手を伸ばした瞬間のこと。ふと河口に目をやると、大津波が防潮堤の上で盛り上がり、まさに越流しようとしていた。あわてて高台の織笠コミュニティセンター付近までポンプ車を走らせると、町はすでに水の中だった。

織笠川流域の集落は土煙を舞い上げながらたちまち流された
（平成23年3月11日午後3時23分撮影）

日本火災学会　2011年東日本大震災火災等報告書（完全版）から抜粋

織笠地区で火の付いたがれきが漂着して発生したとみられる火災。
写真奥が織笠川上流

飛び交う叫び声

当時町役場町民課の課長補佐だった菊地清文さん(65)＝織笠地区コミュニティ推進協議会事務局長＝は地震の直後、災害対策本部の織笠支部長として、織笠コミセンに向かった。石油ストーブを各部屋に置くなど避難所設営の準備を進めていると、外の方が騒がしい。黄色い土煙が舞い上がって上空を覆い、家がどんどん流されていく。「織笠は終わりだー」。高齢の女性が泣き叫んだ。

「人ががれきに挟まれている」。午後6時過ぎ、最初の遺体が収容された。80代の女性だった。左足に大けがを負った50代の女性も戸板に乗せられて運び込まれ、約150人の避難者でコミセンは騒然となった。

着火したがれきが漂着

昆さんによると、山田道路（三陸沿岸道路）の織笠高架橋の下付近で浸水した街区に、火の付いたがれきが織笠川を行ったり来たりしながら流れ着いた。火はたちまち水面を覆っていた油を伝って、家屋に燃え広がった。昆さんらは織笠の山間部を管轄する第5分団の助けを借り、同分団のポンプ車をコミセン付近に配備。近くの防火水槽から取水し、ありったけのホースをつないで放水したが、すぐ尽きてしまう。その次に可搬ポンプで織笠小学校のプールの水を利用、北側の住宅や山林への延

焼を懸命に食い止めようとした。

そのうち山田地区の大規模火災の情報が入ってきた。「避難場所の山田中学校に延焼したら大変なことになる」。4、5両分団の団員らは織笠の現場の火勢が弱まった隙を狙い、ポンプ車で中学と町民グラウンドを経由して現場に向かった。長崎一丁目付近で発生した火災が境田町からさらに南側の林野に迫ろうとしており、付近の防火水槽から放水。二つの現場の間を数回往復し、団員はポンプ車の中で交代で仮眠を取った。織笠では無線機のバッテリーが切れ、水源のプールと火災現場との間に数人の伝令を置いてポンプの水圧の上げ下げなどを指示した。織笠の火災は通りかかった自衛隊の応援を得るなどして、発生から3日後の夜中にようやく鎮火した。

要介護者ケアに苦慮

織笠コミュニティセンターには避難者のほかに、親族や友人の安否を確認しに来る人が大勢詰め掛け、混乱が続いた。菊地さんが最も苦労したのが、介護が必要な被災者の受け入れだ。当初から寝たきりの高齢者が2人避難していたが、津波の翌日の夜、被災した船越の老人保健施設「シーサイドかろ」に入所していた織笠の住民が4人ほど搬送されてきた。当時、町内には避難所に指定された福祉施設がなかった。コミセン近くに住む40代の女性看護師が1週間つきっきりで世話したが、過労で動けなくなってしまう。交代した親族の看護師もダウンし、最後は町役場に勤める20代の女性保健師に頼らざるを得なくなった。

町は震災時の教訓を踏まえ、平成25（2013）年、国の指針や地域防災計画に基づいて特別養護老人ホームなど民間の福祉施設12カ所を「福祉避難所」に指定した。菊地さんは「災害弱者はどこにでもいて、日中は要介護者が家に一人きりというケースもある。地域力でカバーできれば良いが、なかなか難しい」と言い、大津波を経験して宅地が高台に移った今、土砂崩れなどそれ以外の災害も想定して弱者対策を講じる必要性を指摘する。「電気も何もない所でせめて1週間生き延びる態勢を整えるべきです」

織笠、山田両地区の火災現場を往復して消火活動に当たった昆定夫さん

役場職員として避難所運営に従事した菊地清文さん。福祉避難所の重要性を痛感した

山間部で活発な支援

織笠地区コミュニティ推進協議会田子の木ブロック長の中村茂彦さん（69）は山間部の自宅で大きな揺れを感じた約30分後、不安に駆られ、軽トラックで織笠川沿いを下がった。「織笠が見えねえ、一軒も」。河口から約1・8キロ離れた織笠漁協のサケ人工ふ化場付近で遠望して、津波で流された町の惨状に言葉を失った。織笠コミセンに行って親戚らの安否を確認し、避難者が暖を取るためのたき火のまきを集めることを思いつく。翌12日未明までストーブ用のまきが庭先に積んである家々を訪ねては軽トラックに満載、コミセンと、同じく避難所になった織笠小に届ける作業を5回ほど繰り返した。

12日朝、白石・田子の木生活改善センターには炊き出しをしようと地域住民約30人が集まっていた。各自が米や梅漬け、のりを持ち寄っておにぎりをこしらえ、1日2食分をコミセンと織笠小、山田高校の各避難所に運んだ。炊き出しは10日間ほど続いた。田子の木ブロックは100世帯余り。食材のほかに防寒用の毛布や丹前など、全世帯が何らかの物資を提供してくれた。地域は河川敷の野焼きや草刈り、清掃などの共同作業を通して、日ごろから共助の習慣が根付く。中村さんは震災時の支援活動について「当たり前のことを当たり前にやっただけ。あらためて言われなくても、自然と助け合うもんだからね」と話す。

避難者に正確な情報を

織笠小の避難所で、自主運営委員会の委員長を務めたのが、現織笠地区コミュニティ推進協議会長の八木善政さん（71）だ。被災者側の要望を行政に伝えるパイプ役を果たすなど、円滑な避難所運営に尽力した。ピーク時で240人近くいた避難者を八つの班に分けて束ね、さらに各班から人員を抽出、実働部隊として、物資受け入れ対応▽保健衛生医療▽炊き出し調理▽運搬――の4班を編成した。

非常時に情報を正確に、分かりやすく伝えることは、パニックや混乱を未然に防ぐ。八木さんが特に力を入れたのは、行政から届いた連絡や文書の内容をかみ砕いて紹介する「避難所だより」の発行だ。パソコンで編集して印刷したA4判1ページの紙面。各班の中で回覧する。当初はほぼ日刊で、避難所が閉鎖する8月中旬までに180号を数えた。

中村茂彦さんは地域の人々に支援を呼び掛け、避難所に物資を届け続けた

織笠小避難所の自主運営委員長を務めた八木善政さん。効果的な情報発信に心を砕いた

例えば、弔慰金や義援金の支給の案内、支援物資の配給や炊き出しなどに関する生活情報、著名人の慰問のお知らせ……。「行政レベルの文書をそのまま流しても、一般の避難者は理解しにくい。その情報は命や金銭に関わることもあるので、きちんと分かりやすく伝えることに重点を置いた」と八木さんは振り返る。

ストレッチを指導

「助けてー」。30代と思われる女性の切り裂くような叫び声が一帯に響き渡る。女性は2階建ての家屋の屋

根にはい上がり、強い引き波に流されるまま、必死に手を振っていた。元警察官の福士寛さん(75)は自宅近くの坂道の途中で、なすすべもなくその光景を見守るしかなかった。「歯がゆかった」。女性の安否は定かでないが、今も悔しさがこみ上げる。

津波から4日後。福士さんは織笠地区の三つの避難所を回り、入所者に体の筋肉を伸ばすストレッチ運動の指導を始めた。平成16(2004)年の新潟県中越地震で自家用車に避難していた人が、長時間同じ姿勢を取って血栓を生じる「エコノミークラス症候群」で死亡したことが念頭にあったためだ。「皆さん、こんにちは。今日も来ましたよ」。週に1回ほど、避難所の織笠小学校の教室などで声を掛け、座ったまま上体を伸ばしたり、腰を回したりする。初めは全く反応がなかった。そのうち徐々に真似する人たちが増え、避難所が閉鎖する8月には「先生」と慕われていた。

被災者の傾聴ボランティアを続ける福士寛さん。
「心の再建は簡単に進まない」という

石ヶ森桂山さんは僧侶として無力さを感じる一方、
必要とされていることも分かった

被災者が地区内の仮設住宅に移ってからは、傾聴ボランティアの活動に打ち込んだ。震災の前年に看取った母親との対話に役立てようと、東京が本部の高齢者の生きがいを考えるNPO法人でボランティア養成の講座を受けた経験があった。同NPOの呼び掛けで10月、町内にボランティア組織「えがお」を立ち上げ、盛岡のメンバーらと手分けして仮設住宅の各戸を訪問、入居者一人一人と対面した。

傾聴で心の復興を

「最初のうちはどうしても津波の話になる。命と引き換えのドラマだから、お互いに手を取って泣く。こちらは、大変でしたね、苦労しましたねと言って、聴く。これだけでいい。相手はその状況を思い出して、涙ながらに訴えるんです」

意見は言わず、ただひたすら聴く。津波から逃げる途中、妻の手を離してしまった高齢男性は後悔のあまり、いまだに悲しみを吐露できずにいる。震災で心が傷ついた児童を癒やそうと、不安を抱える家族からも同時に傾聴する……。「小説以上の事実」を聞かされることもしばしばだと福士さんは言う。

これまで100人近くと接した。道路や橋、建物など町の復興はいずれ時間が経過すれば完了するが、肉親や親しい人を亡くした被災者の「心の再建」は簡単には進まない。福士さんも自殺者の増加を危惧する。それでも「この地域は『結(ゆい)』の精神が強いから、ここまでやってこられた」。心を復興する鍵は、地域の絆を背景に成り立つ交流だと信じている。「傾聴の要員も必要だし、行政も関心を持ってもらえれば」

寺に戻ると遺体が

津波の後、消防団員らはがれきの下から遺体を見つけると、身元の分かる人には名札を付け、斎場に隣接する山際の曹洞宗龍泉寺にトラックなどで搬送した。住職の石ヶ森桂山さん(42)は、花巻市に里帰りしていた妻と生まれたばかりの長男を迎えに行っていたところで地震に遭い、同行した母と2人だけで翌12日朝に寺に帰還。同寺は120年前の明治三陸津波が境内地の直前まで押し寄せただけに、織笠の被害の甚大さを恐れていた。道すがら釜石市鵜住居(うのすまい)や大槌町の惨状を目撃した。寺に着くと、本堂などに40体ほどの遺体が安置されていて、がく然とした。遺体のかたわらで、思わず「何で逃げなかったのって語り掛けた」。檀家として日ごろ慣れ親しんできた人ばかりだ。泥で汚れた顔を拭き、手を組ませ、曲がった足は伸ばし、夫婦は隣同士に寝かせた。

「和尚さん、この子を抱いてやってください」。その日の夕方、女性2人が3歳に満たない小さな女の子のなきがらを連れてきた。母親と祖母だった。石ヶ森さんは女の子を胸に抱くと、理不尽さに体が震え、涙がとめどもなく流れた。「何が宗教者だ、神だ、仏だ」。心の中で叫んだ。亡くなった女の子と、全く同じ年頃の長女の姿が重なったのだ。「ご遺体が(柔らかくて)くたくたなんですよ。それが悔しくて、悲しくて」

消防団員が遺体を運んでくるたびに、仏具の鈴(りん)を鳴らして読経し、団員も共に焼香。弔いの日々が始まった。付近で電力が復旧した15日以降、斎場の火葬炉が使用できるようになり、宮古市の僧侶たちも供養の応援に駆け付けた。町の斎場で間に合わない遺体は、軽米町や九戸村、二戸市など内陸の市町村の協力で荼毘(だび)に付されることが決まり、石ヶ森さんが異論を唱えていた土葬の仮埋葬はしなくてもよくなった。3月末に龍泉寺で震災後初の葬儀を営み、最終的に109人の檀信徒に引導を渡した。

駆け付けた青年僧

曹洞宗の修行の一つに「行茶(ぎょうちゃ)」というものがある。元は修行僧が法(ほう)会(え)などで一堂に会して行う茶会を指し、日常の喫茶も立派な修行だとの禅宗の教えを背景とする。特に震災以降、全国曹洞宗青年会が中心となり、被災者に日本茶やコーヒーを振る舞いながら傾聴ボランティアをすることを「行茶活動」と呼ぶようになった。石ヶ森さんは当時の青年会長に相談し、山田町にもボランティアの僧侶を継続的に派遣してもらうことにした。

津波から間もない3月、若い僧侶3人と船越地区の避難所を訪れた時のことだ。コーヒー豆をその場で挽いてドリップすると、辺りに芳香が漂う。70代の女性が声を上げた。「誰に胸のうちをぶつけたらいいか分からなくて、悶々(もんもん)としてた。今日は何でもかんでもぶちまけるから」。女性は、気丈に振る舞う被災者も実は津波で肉親と悲しい別れをしているなどと話し、別れ際に「和尚さん、ありがとう」と何度も感謝の思いを口にした。「行茶、傾聴は本当に必要とされている」と実感したひと時だった。

極めて激甚な災害が僧侶、宗教者としての自覚を強く促したのか。石ヶ森さんは「いや、そうじゃない」と言う。「心に信を持ってとかいう行動じゃなかったかもしれない。要するに、『催すがごとく』。用足しを催すでしょう。心の催すがごとくですね」

あのころ、きっと誰もがそうだった。そして、過去に大災害に出遭った数え切れない人たちも。

上空から見た被災後間もない織笠地区（平成23年3月28日午前10時7分撮影）

取材時期＝平成28年4月（昆さん・八木さん・福士さん）、同5月（菊地さん・石ヶ森さん）

ルポ 私たちのまちが消えた 船越

逃げ延びた子供たち
船越小、津波にのまれる

大津波の翌朝、一夜を過ごした民家から
消防団員の誘導で避難する船越小の児童ら
（平成23年3月12日午前8時8分撮影）

地元校務員が再避難進言

「校長先生、後で笑われてもいい。もっと高い所に逃げましょう」。あの日、校務員の一言が町立船越小学校の校庭にとどまっていた児童・教職員約150人の背中を後押しした。裏山に上り始めてからわずか5分後、大津波は鉄筋コンクリート造2階建ての校舎の1階部分をすっかりのみ込んだ。幼少のころから船越の海を肌で知る校務員の進言を、内陸出身の校長ら教職員が素直に受け入れ、悲劇を免れた。

地震直後、校庭に避難

当時校長だった佐々木道雄さん(59)＝現・奥州市立岩谷堂小学校長＝が校長室にいると、携帯電話の緊急地震速報が突然、危急を告げた。すぐさま職員室に移動、情報を得ようとテレビをつけた直後に激しい揺れが。停電で全校放送が不能になり、佐々木さんは2棟あった校舎の各教室を回って校庭への避難を呼び掛けるよう、副校長と養護教諭に指示した。

校内にいた児童は、すでに帰宅した1年生や欠席者ら15人を除く159人。船越小は船越湾の海岸から約170メートル離れた標高13メートルの位置に立地し、町指定の緊急避難場所で、生活の場にもなる避難所だった。教職員12人は同小の避難マニュアルに従い、地震発生から5分後には児童らを校庭の北側に集めていた。

教職員は出欠簿と児童の顔ぶれを突き合わせるなどしながら点呼に当たるとともに、余震を怖がる児童を懸命に励ました。迎えに来た保護者に23人を引き渡し、136人が残った。

避難した校庭北側からは校舎にさえぎられて海が見えない。校務員の田代修三さん(60)はその時点で津波の襲来を予想していたが、せいぜい2メートルぐらいだと思っていた。それでも海が気になって、2度、3度と校庭の南西側にあったプールの脇を通って船越湾を望む防潮堤の上に立った。4度目に湾の奥を眺めた時か。大槌町の吉里吉里（きりきり）平島の北端に連なる野島から四十八坂海岸にかけての水平線が、幅広く「コップの表面張力のように」盛り上がっていた。「これはとんでもない波が来っぞ」。田代さんは田の浜地区の漁家の出身で、明治生まれの父から津波の教訓を繰り返し聞き、小学生の時にはすでに船をこいで沖に出ていた。「目と体で」大津波を直感したという。

「笑われてもいい、裏山へ」

防潮堤のてっぺんから校庭北側まで約200メートル。全速力で走り抜け、佐々木さんに告げた。「校長先生ねえ、ここにいたら駄目だあ」。2人とも「タカとか鬼のような目」で合図を交わし、佐々木さんは即座にさらに高所への避難を決断した。佐々木さんの記憶では、田代さんの口調は意外と穏やかだった。「もし津波が大したことなくて後で誰かに笑われたっていいから、逃げた方がいいと」。この時、午後3時20分ごろ。田代さんを先頭に、「避難訓練の続きのような整然とした動き」で、歩いて北側の裏山に分け入った。遅れがちな低学年児童の手を高学年が引いた。最後尾の佐々木さんが振り返ると、津波が下の方の沢を駆け上ってくるのが見えた。

津波は2階建ての校舎2棟の2階床上まで到達、体育館は水圧で壁がすっかりぶち破られ、木の床は波が打ったようにたわんだ。職員の自家用車は濁流にのまれてひっくり返ったり、渡り廊下の屋根に乗り上げたりした。校内で見つかった掛け時計の針は午後3時27分を指して、止まっていた。

我に返って逃げる

「もしあと5分、避難が遅れていたら……」。佐々木さんは防災学の

船越小のすぐ南側にある日向脇（ひなたのわき）集落の防潮堤を越える津波
（平成23年3月11日午後3時17分撮影）

第一人者、片田敏孝・群馬大大学院教授のいう「正常化の偏見」にとらわれていたと反省する。同教授は釜石市の小中学校で防災教育を行い、ほぼ児童・生徒全員に当たる約3千人が東日本大震災の津波から避難して助かったことにつなげた人物だ。非常時にあっても自分だけは助かる、大丈夫だと思い込み、都合の悪い情報を退けて、平時と変わらない精神状態を保とうとする心理――。田代さんの進言がこの偏見を打ち破るきっかけになったというわけだ。

「片田教授の説によると、あの時、私たちは『逃げない』という意思決定をしたのではなくて、『逃げる』という決断ができなかったことになります。子供たちを落ち着かせようとなだめているうちに、校庭でずるずると時間ばかり経ってしまった。どうするか決められなくてふわーっとしているところに田代さんの一言があって、ハッと我に返りました。逃げると決めた時に、誰も『ここは避難場所だから大丈夫ですよ』などと反論せず、先生方も子供たちもすっと動いてくれたことが大きかったと思います」

津波の直撃で大きく被災した船越小昇降口（平成23年4月1日午後2時1分撮影）。
付近には住民ら約30人が避難していたとみられる

津波で外壁が打ち破られた船越小体育館（平成23年4月1日午後2時撮影）

田代さんも「マニュアル通りにみんな校庭に集まって、少し余裕があるように見えた。そして、そこからは海が見えない。集団の中にいて外からの情報が目に入らないと、命を落とすような危険が迫っていても、そういう状態になるのかなと思いました」と証言する。

1人の犠牲もなく

児童と教職員らは裏山を上へ上へと行き、20分ほどで標高約40メートルの林間に逃げ延びた。津波の危険が去ったと判断された約1時間後の午後5時、ふもとに下り、船越小近くで浸水を免れた民家3軒が児童らを宿泊させてくれた。佐々木さんがほかの避難者らと戸外でたき火に当たっていると、遠くでバーンという爆発音が聞こえた。山田地区の方角の空が赤く染まっており、火災でガスボンベか何かが破裂したらしかった。こちらから船越半島の付け根を挟んで西側の高台は被災していない。佐々木さんは1キロメートルも離れていないそちら側に、子供たちの無事を伝えられないのが歯がゆくて仕方なかった。

果たして翌朝、救援の消防団第1分団の団員15人が炊き出しのおにぎりを持って到着した。対岸の高台の船越保育園からこちら側のたき火がかすかに見えたのと、田の浜地区で浸水した船越湾漁協の職員が船越小に通う娘の安否を確かめに裏山に入った際に児童らを見つけ、その足で同保育園からも近い第1分団屯所に伝えたおかげだという。児童らは船越半島付け根の浸水地帯を山田湾側に約1・7キロメートル歩いて北上、高台から半島に下る浦の浜大橋の中ほどに待機していたバスに乗り込み、保護者の待つ船越保育園へ。1年生のうち先に帰宅した9人、欠席・早退した6人、裏山に避難する前に保護者らに引き取られた23人も全員が無事で、船越小の児童・教職員は

震災当時に避難した山道をたどりながら説明する田代修三さん。
漁家の出身で大津波を直感したという

「災害時は子供も親も自分で自分の命を守らねば」と話す
佐々木道雄さん（奥州市立岩谷堂小で）

被災から1カ月、上空から見た船越小（平成23年4月11日午前10時26分撮影）

きな波がざぶんと襲いかかるようなイメージ。実際はずーっと押し寄せてくるものなのだと船越に来てから聞いてはいましたが、まさかそれがやって来るとは」。津波に関する現実感が希薄な上に、前年2月のチリ地震で大津波警報が出ながら大きな被害がなかったことも、「正常化の偏見」を助長したようだ。

2年間暮らした学校下の教員住宅は土台だけ残して流失した。「数少ない荷物でも、ああ、あれは流されてしまったんだと分かるとガクッとくる。たった2年でこうですから、町に何十年も住んでいた方々の喪失感は計り知れないものがあります」

自らの命守る教育を

得た教訓は何か。佐々木さんは、東北の津波常襲地帯に伝わる「津波てんでんこ」の言葉を挙げる。自分の命を守り、共倒れを防ぐために、脇目も振らずてんでんばらばらに逃げよという教え。片田教授はここからさらに踏み込んで、災害時に自らの命を守る術を学ぶよう子供たちを指導し、親には「子供を信じて、自分たちも逃げよ」と伝える。これを受けて佐々木さんは「どんなことがあっても（子供が）『自分で自分の命は守れるよ、だからお父さん、お母さんも自分の命を守ってね』という関係になれるような避難訓練を何回もしなければならないと思います」と提言する。

今後の復興を支える原動力は、郷土を誇り、愛する心だと考えている。「自分はここで生まれてよかったと思える子供たちを育てていかねば、本当の復興に向かっていけないのでは」と持論を話す。

佐々木さんは「船越の地は明治三陸大津波でも大きな被害を受けた。今いる住民は、その時に生き残った方々の子孫。明治の震災と今がつながっていると

利用者と職員の合わせて88人が犠牲になった介護老人保健施設「シーサイドかろ」（平成23年3月19日午後2時23分撮影）。屋上に乗り上げた自動車が津波の激しさを物語る

分かれた明暗

一方、船越小の昇降口付近に避難

一人も犠牲にならなかった。

薄かった津波の現実味

佐々木さんは奥州市江刺区で生まれ育ち、沿岸部の洋野町の小学校で教頭を務めた一時期を除いて、ずっと内陸で過ごした。校長として初めて赴任したのが船越小だった。「内陸の人間にとって、津波というと大して津波にのまれた近隣住民もいた。佐々木さんや田代さんは校庭にいたために、昇降口辺りの状況が分からなかった。この時、流されながらも九死に一生を得た住民によると、約30人が避難していた。津波が防潮堤を越えるのを見ても「ここまでは来ない」と思っていたという。船越小の周辺では約20人が亡くなっており、このうちの何人かは同小に逃げ込んだ可能性がある。

また、船越小から北に約1・4キロ離れた船越地区浦の浜の介護老人保健施設「シーサイドかろ」では、県内の高齢者福祉施設で最多の、利用者74人と職員14人が犠牲になり、船越小児童や、同施設に隣接し全員が逃げ延びた障害者支援施設「はまなす学園」と明暗が分かれた。

津波の怖さ、肉声で伝え

田代さんは教訓を語り継ぐ大切さをこう話す。

「時間が経過して復興が進んでも、あの津波を経験した人が当時の怖さを『生の声』で伝えていくことが大切。家庭でも地域でも経験者が折を見て語り部になれば、小さな積み重ねが伝承につながって、将来、同じようなことがあったときに力を発揮するはずです」

船越小学校は津波の後、直線距離で約4キロの県立の研修施設「陸中海岸青少年の家」に仮の校舎を間借りした。翌年には海抜13メートル地点にあった被災校舎を解体し、裏山を切り崩して同24メートルの高さに建設用地を造成。震災3年後の平成26（2014）年2月に鉄筋コンクリート造2階建ての新校舎が完成した。児童らは同年4月から新校舎に通い、船越小は被災3県で建て替えなどが必要とされた公立校約190校の中で、いち早く完全復興を果たした。新しい校庭からも、どの教室からも、あの日見えなかった海が見渡せる。

取材時期＝平成26年10月（田代さん）、27年12月（佐々木さん）

被災当時の船越小学校（平成23年3月19日午後3時23分撮影）。海抜13メートル地点にあった

海抜24メートルの高さに再建された現在の船越小学校

ルポ 私たちのまちが消えた 田の浜

風化した惨禍の記憶

高台を襲った津波、火災

田の浜地区は「下」と呼ばれる低地（写真手前）だけでなく、
高台の「新宅地」にも津波が及び、火災が発生した
（平成 23 年 3 月 12 日午前 9 時 31 分撮影）。
左上の家々は新宅地の北西部

地区孤立、山林にも延焼

東日本大震災の津波は 80 年前の津波の後に人々が移り住んだ高台をも襲った。外洋の船越湾を望む小さな漁師町、田の浜地区。がれきはせり上がるように海から山側に押し寄せ、浸水した高台の住宅地で起きた火災は瞬く間に背後の山林に燃え広がった。地区は孤立し、全壊した家屋は 6 割以上、犠牲者の数は集落の人口の 12%に当たる 105 人に及ぶ。明治 29（1896）年と昭和 8（1933）年の大津波で甚大な被害を受けながらも、記憶と教訓が風化した漁業集落で、人々はどう行動したのか。群像を追った。

発車直前に大地震

昭和三陸大津波の後に本格的に造成された高台の通称「新宅地」の中央にある交差点。ブイッ、ブイッ、ブイッ。岩手県北バスの運転士長門繁典さん(49)が、発着点の田の浜バス停から宮古駅に向けて発車の準備をしていると、携帯電話の緊急地震速報の警報音がけたたましく鳴った。直後に「ブレーキから足を離したら、バスがどこかへ飛んで行ってしまうような」激しい揺れ。恐怖に駆られた90代の高齢女性が後部乗車口のステップからあわてて降りようとするのを、後ろに並んでいた人たちが転げ落ちないように支えた。

田の浜で生まれ育った長門さんは、津波襲来を直感。水門が閉まる前にバスを船越地区の国道45号沿いの営業所まで戻そうと考えたが、踏みとどまった。バスには停留所前に立つ家の乳幼児2人を連れた若い母親、40代ほどの男性とその母親の計5人が避難してきていた。長門さんはバスの外で海面を見つめる。対岸の大槌町吉里吉里（きりきり）辺りの海に、黒いモヤモヤしたものが盛り上がってきた。津波だ。とっさに若い母親から女児を預かって抱き上げた。バスにいた全員で一目散に、地区の中央を東西に貫く通称「メインストリート」の坂道を山手に向かって駆けた。

流され、道ふさぐバス

「バスのエンジン、止めてくれー」。長門さんが山際の畑でほかの避難者と話していると、男性が来て叫んだ。バス停周辺では信じがたい光景が広がっていた。バスが車体の向きを真横に変え、頭を北側にしてメインストリートをふさいでいる。バスはその横っ腹で、「下（した）」と呼ばれる低地の住宅街から押し寄せてきたがれきを食い止める格好になった。がれきはバスの屋根と同じ高さほどに堆積。バスの右側には軽トラックなど車両3台が数珠つなぎになって接触していた。新宅地で比較的低い南西の区域まで津波の濁流は達し、重量7トンにも及ぶバスや乗用車を押し流した。

マス目状に区画された新宅地の南西に住む矢口静江さん(66)は、自宅台所で夕食の献立を思案している時、地震に襲われた。6歳の孫美沙希ちゃんを、仕事が休みだった娘婿の明夫さん(35)がすぐに地区内の「わかき保育園」から連れ戻した。「ここまで津波が来たことはないっけえに」。元漁師で、昭和三陸大津波と昭和35(1960)年のチリ地震津波の規模を知る舅の丈一さん＝当時(96)＝は、頑として避難の呼び掛けに応じようとしなかった。

間一髪、孫の手引く

静江さんも津波より余震で家が倒壊する恐怖が先に立った。「おじいさん、大事な孫を預かってる身だから先に行くね。後から逃げて」。3歳の孫奈那美ちゃんを負ぶい、美沙希ちゃんの手を引いて、後ろ髪を引かれる思いで家を飛び出した。いっ

津波の濁流にもまれてひしめく低地部の家屋（平成23年3月11日午後3時23分撮影）。海中に水没している左側の建物は船越湾漁協

高台には津波を逃れた町内施設の送迎バスが止まっていた。寒い日だった。バスに添乗していた糠森美桂さん(49)は、津波でずぶ濡れになった人のほか、静江さんら高齢者や小児を優先的に暖房の効いた車内に迎え入れた。車内には30人ほどがおり、皆放心して無言だった。「怖いよ、怖いよ」。奈那美ちゃんは静江さんにしがみついて泣きじゃくり、美沙希ちゃんも「お母さんに会いたい」と、釜石市の病院に看護師として勤める母親の由美子さん(35)を恋しがった。静江さんは、サッパ船で弟らとマツモ（海藻の一種）の漁に出た夫正さん(67)の安否がひどく心配だった。

はぐれていた明夫さんたちに連れられて、丈一さんもバスに乗り込んだ。家の中で津波に直撃されたらしく、もうろうとした様子だった。自宅に隣接する空き地に流れ着いていたといい、体のあちこちにあざがあった。「何があったんだあべ」とうめき、頬をたたいてくれとか、つねってくれとか静江さんに頼んだ。

住宅街から山に飛び火

田畑フミさん(80)は、新宅地北側の山手にある自宅の2階で、津波が押し寄せてくるのを目撃、あわてて家の裏から斜面を上って高台に逃げた。当時、帯状疱疹(ほうしん)を患っており、そばにいた人が「寒いべえすけえにバスさ乗れ」と言ってくれた。津波にのまれた人たちは車内でも震えていた。田畑さんは津波の到達しなかった自宅にいったん戻り、使い捨てカイロを持って来て分け与えた。

糠森さんの記憶だと午後5時過ぎ、南側の山林の隙間から赤い火が燃えているのがチラチラ見えた。津波の最大波から間もなく、浸水した新宅地南側の街区で起きた火災が飛び火したのだ。「火が山を伝ってこっち（東側）まで来たら大変なので、早く下りなきゃと判断しました」（糠森さん）。消防団の車が先導し、比較的安全だと思われる新宅地北側のたん自宅裏に止めていた自家用車の黒いミニバンに逃げ込んだが、外の様子が騒々しい。孫と一緒に車から降りると、「下」から新宅地に上って来た住民たちが青ざめた顔で「逃げろ、逃げろ」と手を振っている。この時、津波は目前まで来ていた。静江さんは、孫を連れて一気に高台に駆け上った。

新宅地の自宅で津波を目撃、斜面を駆け上がって避難した田畑フミさん

糠森美桂さんは添乗したバスが田の浜に居合わせ、津波にのまれた人たちを世話した

乗合バスを発車させる直前に地震に襲われ、乗客と共に避難した運転士長門繁典さん。直後、バスは津波に流された

交差点付近の路上まで移動した。

3カ所で火災発生

新宅地の火災は翌朝まで燃え続けた。研究機関の調査などによると、乗り捨ててあった複数の自動車に引火して延焼範囲が拡大。消防団第2分団はポンプ車を配備して防火水槽から取水したが、すぐに尽き、屯所付近の沢水を繰り返しためながら放水した。山林に燃え移った火は、東京ドーム35個分に当たる約165ヘクタールという広大な面積をなめるように焼き、林野火災の鎮圧は5日後の16日、完全な鎮火は延焼から実に20日間以上を過ぎた4月2日だった。火災はこのほかに、新宅地との境界に近い低地部の北側や、船越漁村センター付近でも発生した。

11日夜にバスを降りた静江さんたちが翌朝、避難していた山から下りてくると、自宅はすっかり焼け落ちていた。「お父さんはどこ?」。屯所の前に行くと正さんが無事戻っていた。港で津波にもまれながらもかろうじて切り抜け、沖合に避難したという。

正さんによると、タブの大島付近の磯場で漁を終え、荒神社(あらがみしゃ)のそばに差し掛かった時、神社の上の山林から大木が転げ落ち、杉山から一斉に花粉が飛散した。地震の瞬間だった。港ではサイレンが鳴り響き、漁船がどんどん沖に逃げていく。兄が所有する19トンの船舶に乗り換え、避難の準備をしている間にも海面はみるみる上昇した。津波に抗って全速力で発進したが翻弄され、港内を何度も旋回した。「津波の力はすごい。舵(かじ)が利かねえづうんだか、ぐるぐるぐるぐると回って」（正さん）

ようやく脱出した正さんたちは、タブの大島の南方沖に退避。大小30隻ほどの漁船が集まって夜を明かしたという。

火災迫り、ヘリで脱出

矢口さん一家を含め、家を失った住民の多くが集落の南側、標高約115メートルの山の頂に立つ日蓮宗瑞然寺の修練道場（通称「旧タブの木荘」）に避難した。林野火災が延焼を続け、危機が迫った。地区は四方をがれきで阻まれ、陸路では脱出できない。アマチュア無線の資格を持つ消防団第2分団員の1人が役場の災害対策本部との交信に成功。同本部に詰めていた自衛隊がヘリによる救助に乗り出し、12、13両日で、けが人や病人、高齢者を中心に約130人が山田高校や山田南小学校に搬送された。

田畑さんは、バスを降りた後に身を寄せていた大家漁業生産組合からヘリで大槌町立吉里吉里中学校に運ばれた。夜になると対岸の田の浜が火で赤く染まっているのが見えた。

「みんな交代で窓の外を見ては、田の浜は全滅だよって話をして、寝られないのね」

静江さんは釜石から戻った娘の由美子さんと3日後に再会。山田高校から船越地区に住む丈一さんの娘の家に移った。丈一さんはひどく衰弱して伏せったままだった。海水を大量に飲んでのどが渇くせいか、しきりに水を欲しがった。避難して1週間後。一家で田の浜の家の様子を見てから戻ると、丈一さんはこと切れていた。静江さんはその前日、丈一

新宅地の南西で発生した火災は背後の山林にも燃え広がった（平成23年3月11日午後6時7分撮影）

孤立した地区から空自ヘリで搬送されようとする避難者（平成23年3月12日午後2時26分撮影）

さんがふと漏らした一言が忘れられない。静江さんに「母さん」と呼び掛け、こう続けた。「家族って、いいもんだあねえ」

真っ黒い塊が襲う

当時、田の浜自治会の副会長だった五十嵐勝男さん(76)は自宅で激しい揺れに見舞われた後、すぐにヘルメットをかぶり、ゴム長を履いて、隣接する船越漁村センターの方に向かった。センターの前を通るメインストリートに立つと、新宅地の方から乗用車が何台も下りてきた。津波を予感した勝男さんは、海岸を通行しようとする数台の車を制止して引き返させた。妻の浩子さん(72)も通りを挟んでセンターの向かいの広場に避難したが、海岸から100メートル離れた実家に住む母芳江さん(94)の安否が気になった。様子を見に行こうとすると、「鬼のような形相」の勝男さんに押しとどめられた。芳江さんは長男の妻が車で高台に連れて行き、無事だったことが後で分かった。

浩子さんの記憶だと、センターの周辺には近隣に住む20人ほどが集まっていた。「津波が防潮堤を越えたぞー!」。浩子さんは海岸からバイクで上がって来た同級生の男性の鋭い叫び声で我に返り、一目散にメインストリートを駆け上がった。後ろを振り返ると、漁港の入口近く、約300メートル下方に「真っ黒い塊」がそびえていた。それは漁港にある鉄筋コンクリート造り3階建ての船越湾漁協のビルとほぼ同じ高さに見えた。津波が海抜8・35メートルの防潮堤を乗り越え、集落を破壊し始めたころだった。同級生はのみ込まれた。自責の念にさいなまれ、たびたび悪夢にうなされたという。

震災から1年後、浩子さんは助かった息子とセンターの前で偶然再会した。女性の息子は言った。「あの時、うちらの横に確か女の人がいたったが、母さんが亡くなるくらいだっけえ、その人も亡くなったこったよ」。浩子さんが「ごめんね、手を離して。それは私だったんだよ」と告げると、息子は「(浩子さんが)無事でよかった」と泣いた。

勝男さんは浩子さんと同じルートを後から逃げた。新宅地でメインストリートと南北を貫く中央の道との交差点の辺りで、南方向から水が流れ込んできた。昭和の津波でも浸水しなかった一帯だ。水は膝の高さまで達し、乗用車がプカプカと浮かんだ。勝男さんは足を取られて転び、角のたばこ自販機にしがみついた。その場で知り合いの90代の男性が流されてきたのを助け起こした。

避難所のみ込む津波

佐々木聰さん(71)は当時、船越漁村センターの管理人だった。激しい揺れに、日ごろ災害時には避難の手助けをしてほしいと訴えていた足の悪い高齢女性が心配になり、女性を家からセンターに連れてきた。いったん2階に避難させたが、大津波を警戒する消防車からのアナウンスを聞いて別の安全な場所に移動させようとした。そこにちょうど、女性の親戚の男性が現れ、引き取っていった。女性は高台に逃れたが、自宅方面に引き返したと思われる男性は命を落とした。佐々木さんはメインストリートを上りながら、ハンドマイクで避難を呼び掛けた。新宅地中央の交差点を少し行ったところで振り向いて、目を見張った。県北バスと山のようなながれきが道をふさいでいたからだ。

「高い防潮堤が守ってくれると思っていた」と過信を悔いる佐々木聰さん

鉄骨造り2階建ての船越漁村センターは昭和58(1983)年、旧田の浜公民館の跡地に完成。町指定の緊急避難場所・二次避難所で、防災用品や非常食などを備蓄し、町の防災訓練では近隣住民が身を寄せた。しかし、東日本大震災の大津波はその屋上まで達し、新宅地の南西部をも襲った。田の浜で生まれ育った佐々木さんは「高い防潮堤もあり、まさかセンターの2階に津波が及ぶとは思わなかった」。新宅地は緊急避難場所に指定されていた。勝男さんは「住民の誰もがここまで逃げればセーフという認識だった」という。

薄れた警戒心

チリ地震津波では、当時畑だったセンターの敷地の下辺りまで浸水したが、後に防潮堤が整備されてからは津波への警戒心がかなり薄れたようだ。「万里の長城」と形容され、住民に安心感を与えた巨大防潮堤さえ無力で、多くの犠牲者を出した宮古市田老地区と似たような感覚や意識が支配していたといえる。

「(3・11の)2日前にも大きな地震があったけれども何ともなかった。津波は怖いとは感じていても、防潮堤に守られているし、今回も何事もなく終わってしまうんだろうと思っていた」(佐々木さん)

漁村センターがあった「下」一帯は、震災後に危険区域に指定され、もう住宅が建つことはない。海抜12・8メートルの防潮堤が囲み、都市公園事業で津波防災緑地が整備されることになっている。明治と昭和の大津波を経ても、教訓を生かし切れずに低地部で甚大な被害を出した田の浜の現実は、防災対策だけでなく、震災後の集落移転のあり方についても重い課題を突き付けた。

取材時期＝平成27年6月(糠森さん・矢口さん夫妻)、同7月(田畑さん)、同8月(長門さん)、同12月(五十嵐さん夫妻・佐々木さん)

2階まで津波にのまれた上に、付近で火災が発生した船越漁村センター(平成23年3月24日午後4時43分撮影)。町指定の避難所だった

屋上近くまで浸水した3階建ての船越湾漁協(平成23年3月24日午後4時48分撮影)

五十嵐勝男さん(写真右)と浩子さん(同左)の夫妻は、船越漁村センター前から津波に追われながらメインストリートを走った

ルポ 私たちのまちが消えた 大浦

流された指定避難場所 陸側から逃げて犠牲に

少なくとも 12 人が避難したとみられる小谷鳥コミュニティセンター前の町道（右側）と小谷鳥海岸（平成 23 年5月 22 日午後2時 13 分撮影）。津波の威力でガードレールが外れたり、ぐにゃぐにゃに曲がったりした

それでも海と生きる

船越半島の大浦地区にあって、外海の荒波が打ち寄せる小谷鳥海岸。ウニやアワビの漁、畑作などで細々と生計を立ててきた半農半漁の集落は、あの日、30 メートル近い高さの巨大津波にのみ込まれ、根こそぎさらわれた。町指定の緊急避難場所、小谷鳥コミュニティセンターの周辺には少なくとも 12 人が駆け込み、9人が犠牲に。小谷鳥で亡くなった人の実に半数に当たる。陸側の自宅から海沿いのコミセンまで足を運んで流された一家もあり、避難所の立地のあり方に大きな反省を残した。コミセン跡地のそばに建てられた犠牲者 18 人の慰霊碑には「深い悲しみを繰り返すことのないよう」と刻まれている。津波をくぐり抜けて生還した漁業者たちは、それでもなお、海と向き合って生きる。

沖に一筋の黒線が

小谷鳥在住の漁師で三陸やまだ漁業協同組合の理事山崎練磨さん（68）は、山田漁港沿いの川向町にあった同漁協で役員会に出席中、建物がつぶれるかと思うほどの激しい揺れに襲われた。会議は始まったばかりで中止になり、すぐに軽トラックで小谷鳥へ。船越半島に渡る浦の浜大橋から山田湾を横目に見ると、最初の津波だったのか、遠くに黒い一筋の線のようなものが寄せて来ていた。スピードを上げ、ものの15分で外洋の小谷鳥湾に面する漁港に到着したと記憶している。所有する磯船を船揚げ場にロープで結び付け、海岸から約100メートルの民宿の敷地に移動、漁師仲間3人と共に沖の様子を眺めた。

誰もが無言だった。そのうち海面が下がったり、上がったりしてきた。船がどんどん流されていく。「あー、あー」。山崎さんたちは「魂が抜けた」ように、海の方にふらふらと歩いて行った。「波が来たがー！ 逃げろー！」。後ろにいた息子の克（かつ）さん（45）の叫び声で我に返った。当時港にあった灯台の「3倍ぐらい」の高さの巨大津波が、ビルのようにそびえ立っていた。克さんはとっさに軽トラックに乗り込んで走った。津波が追いすがるように迫り、車のマフラーの辺りをパンパンとたたいた。

薄れていく意識

残った4人は一目散に山際に駆けた。ドンッ。山崎さんは津波になぎ倒されて、胸を強く地面に打ち付けたらしい。「ああ、何だろう、何だろう」。水の中でぐるぐるとかき回されながら、あちこちにぶつかり、気が遠くなっていった。「死ぬのって大して苦しくねえんだな……」。そう思った次の瞬間からもう記憶がない。

息苦しさと痛みで目が覚めたのは、津波にのまれた地点から直線距離で200メートル近く離れた高台のやぶの中だった。周辺はまだ明るく、眼下では濁流が行き来していた。標高25メートルほど。津波はそこまで山崎さんを押し上げ、漂着させた。体が動かない。「おーい、おーい」。うずくまっていると、向こうの方から人を探す声が聞こえる。共に逃げた漁師のうちの1人の息子だった。

「気が付いたら標高 25 メートル地点に打ち上げられていた」と津波の恐怖を語る漁師の山崎練磨さん。肋骨が肺に突き刺さる重傷を負った

「助けろー」と叫んだ。近くの民家まで軽トラックで運ばれ、寝かせてもらった。その後に移動した大浦小学校からヘリで花巻空港に飛び、さらに北上市内の病院で緊急手術を受けた。執刀医が言った。「これは苦しかったろう」。肋骨が折れて、右肺に突き刺さっていた。津波の時に一緒だった漁師仲間で、山崎さんより少し年下の兄弟2人は亡くなり、1人は助かった。

コミセンに12人避難か

山崎さんが大津波を見た地点と、全壊した小谷鳥コミュニティセンターは目と鼻の先だった。コミセンは海岸から約150メートル離れ、外洋と港を見晴らす標高約14メートルの山際にあった。目撃者や生還者らの話を総合すると、あの日、コミセンのすぐ北側にあった家々のほか、町道を陸側に300～500メートル以上行った複数の家からも、合わせて少なくとも12人の住民が周辺に避難していた。そのうち一家5人を含む9人が流され、1人を除いて今も行方不明のままだ。

この一家で唯一生き延びた漁師の男性(62)は、海岸から直線距離で約470メートル離れた自宅で地震に遭った。津波を警戒し、車で漁港に急行して所有する磯船をロープで固定。自宅に戻ると、妻と実の娘、乳幼児の孫3人はすでに自家用車で避難した後だった。地震があればいつも逃げている近所の高台にも家族の姿が見えない。

「コミュニティ(センター)さ、行ったかな」。案の定、コミセンの前の町道には孫たちを乗せた車が止まっていて、すぐそばで妻や娘ら大人の避難者が海の様子を眺めていた。男性もその列に加わった。「すごい引き波だったけど、あそこ(コミセン)まで(津波が)来ると誰も思わなかった。来た時はもうおしまいだった」と振り返る。

「待っていて流された」

男性は逃げる間もなく波に巻き込まれ、救助された時の記憶もない。コミセンのすぐ後ろにあった家屋のコンクリートの基礎部分にしがみついていたと後で聞かされた。犠牲になった人たちの大半は陸側から逃げて来た。「(津波を)待っていて、持っていかれたようなものだ」と、ある住民女性は悔やむ。一方、コミセンまで行かず、町道から東側の坂道を山に駆け上がった人たちは命拾いした。そこは普段、男性の家族の避難場所だった。

流された指定避難場所、小谷鳥コミュニティセンターの跡地。
あの日、避難者はコミセン前の町道から海を眺めていた

昭和54（1979）年に竣工した当時の小谷鳥コミセン

小谷鳥コミセンは木造平屋建てで、昭和54(1979)年に落成。延床面積は約83平方メートルで、和室と洋間の集会室や調理室などを併設していた。津波や地震の際の緊急避難場所であり、年に1度の町の防災訓練では地域住民が身を寄せたが、「浜の方角に逃げるのは嫌だ」という人もいた。

平成8(1996)年度の山田町地域防災計画によると、その当時は緊急避難場所と、避難生活を送る「収容避難場所」の二通りに指定されていた。震災当日が授業や仕事のない休日だったら、多くの住民が逃げ込み、さらに被害が拡大していた恐れがある。震災直前の平成22年度の同計画は避難所について「災害に対し安全な場所にあり、また、建物にあっては、災害に強いものであること」などと規定。平成10年に岩手県が実施した「沿岸市町村津波指定避難場所総点検」でも、特に問題点は指摘されなかった。

過去の大津波でも浸水？

しかし、県が平成16(2004)年度に作成し、ネットで公開している「津波防災マップ」の科学的根拠に基づくとされる推定によると、小谷鳥コミセンの立地は明治三陸大津波(1896年)や昭和三陸大津波(1933年)と同規模の津波が発生した場合に浸水する恐れがある。明治津波からほぼ3カ月後に遠野の実業家山奈宗真(1847～1909)が被災地をくまなく踏査した記録「岩手県沿岸大海嘯部落見取絵図」でも、同立地の至近まで津波が迫ったと思われる境界線を図示している。

このように町内で過去の津波の浸水域にあった疑いがあり、東日本大震災でも被災した緊急避難場所は57カ所中5カ所、生活の場となる二次的な避難所は24カ所中2カ所だった。そのうち飯岡防災センター(山田地区)と船越漁村センター(田の浜地区)は緊急避難場所と避難所を兼ねていた。さらに、明治・昭和の津波が及ばなかった震災当時の位置の船越小学校(緊急避難場所・避難所)にも今回の津波は押し寄せた。

堤防信じ、さらわれる

小谷鳥海岸から北に2キロ余り離れ、山田湾に面した静かな漁師町、大浦の集落はどんな状況だったのか。

船大工の花崎重信さん(70)は漁港の防潮堤に近い作業場で地震に遭った。津波を用心して軽トラックを高台に上げ、防潮堤付近まで再び下りた。「3メートル以上の津波が予想されます」。防災行政無線が大津波警報の発表を伝えた。「堤防も高いし、まさかここまで(波が)来るとは思わなかったから、安心感づうか、

船大工の花崎重信さんは津波にさらわれ、
しがみついた立木とがれきの間に左腕を挟まれた

花崎さんの作業場に近い一帯の被災状況（平成23年3月25日撮影）。
津波は高さ6.6メートルの防潮堤（左）をやすやすと越えた

のんきにしたったの」。放送を聞いて波は低いだろうと考え、油断した。

防潮堤の上で海を眺めていた人たちが叫んだ。「おっきいの（波）が来たー」。花崎さんはとっさに作業場のシャッターを閉め、原付にまたがった。振り向くと、波が防潮堤を越えた。「まずい！」。原付を放棄して、すぐ背後のコンクリート階段の付いた斜面を駆け上がろうとした瞬間、波にさらわれた。水の中でもがきながら、無我夢中で斜面のクリの木にしがみつき、両手で抱えた。

首まで水に浸かり、波が押したり引いたりするたびに体が上下した。そのうち大きな柱のようながれきが流れて来て左腕にぶつかり、クリの木との間で腕をきつく挟んだ。30分近く耐えたところで、斜面の上にいた男性2人に引き上げてもらった。左肩から上腕にかけて、ひどい内出血で黒ずんだ。作業場と、すぐそばの自宅は全壊した。

とっさに「沖出し」決断

漁港近くの倉庫にいた漁師の野田實さん（74）は激しい揺れに、すぐに10トン級のイカ釣り漁船「稲荷丸」を洋上に避難させる「沖出し」をしようと決断した。機関長の実弟が宮古市から戻ってくるのを待って、地震から約20分後に船を出発させた。外洋に逃げるために山田湾の湾口を目指す。湾口の明神崎の灯台を波がのみ込み、付近では直径30メートルほどの大きな渦が巻いていた。渦を避けて全速で船を走らせたが、抵抗があって思うように進まない。そのうち、引き波に乗ったせいなのか、急激に速度が上がり、20ノット（時速約37キロ）ほどで外洋に出ることができた。町内各地を大津波が襲ったのは、この時間帯だと思われる。

沖合からは山田と織笠の町で煙が上がっているのが見えた。午後6時ごろ、湾内に入ろうとすると、津波で破壊された家屋や養殖施設、根こそぎ抜けた松の大木などがどんどん流れてきた。その日は湾の中央付近で夜を明かした。山田の火災は上空を赤々と染め、ボンボンという爆発音が海を渡って聞こえてきた。船がようやく大浦漁港に接岸できたのは、潮位の変動が収まった3日目の早朝だった。

船は漁師の命

野田さんは運よく沖出しに成功したが、間に合わずに命を落とした漁師仲間も多くいた。「（沖出しをする、しないの）どっちがよかったかづうのは、難しいんだ」と今も自問する。津波から船を「助ける」と表現し、その行為の源は「漁師の本能だ」という。「今までこれ（漁船）によって生かされてきた。自分に適したように船を整備したり、造ったりしてるから、身内づうんだか、そういう考えが当然起きてくるんだね。何なんだかねえ、相棒づうんだか」。海面の異状に気づいていたのに浜の方に歩いてしまった小谷鳥の山崎さんも、「うちにすれば船は命だもん。これでウニとかアワビ、昆布を採らないと生活できないから」と話す。

当時の山田町地域防災計画は地震や津波の際の船舶の避難方法を明記していなかったが、震災後の改訂で、▽漁港にいる船舶の乗船者は直ちに陸上の避難場所に避難する▽漁港周辺にいる船舶で避難海域に逃げる方が早い場合や、沖合にいる船舶は直ちに避難海域に避難する――といった項目を盛り込んだ。野田さんは漁船が津波で損害を受けたときの補償制度や公的支援の存在が周知されれば、無理な沖出しも減るのではないかと考えている。

山田湾内で津波の抵抗に逆らいながら、漁船を沖に避難させた野田實さん。その行為は「漁師の本能」だという（所有する「稲荷丸」の前で）

山崎さんは震災から5カ月後には仕事に復帰し、今も海を生業の場とする。震災後に新造した磯船は、船大工の花崎さん特製の型によるものだ。父親から技を受け継ぎ、この道50年以上になる花崎さんは、内陸で避難生活を送っていたころから船の修理を頼まれるようになった。初めは「けがもしたし、やる気がなかった」が、自分が造った船だけでも直したいと、小谷鳥に作業小屋を建てて仕事を再開した。大工人生で製作した船は100隻を超える。「波乗りが良く、安定性がある」と評判だ。

悲しみ繰り返すまい

震災から3年後の平成26年、小谷鳥コミセンの跡地に近い山際に地域の犠牲者18人を悼む「祈りの慰霊碑」が建てられた。裏面にこう刻む。

先祖伝来守り継がれてきた
この小谷鳥集落は一瞬にして
壊滅的な被害を受けた
犠牲となられた住民の魂と想霊
そして手を合わせることしかできない
深い悲しみを繰り返すことのないよう
永く後世に語り伝えるため
この碑を建立する

慰霊
そして手を合わせることしかできない
深い悲しみを繰り返すことのないよう
永く後世に語り伝えるため
この碑を建立する

津波で母親を亡くし、この碑文を考案した中年男性は「二度と被害がないようにというのは確かにその通りだけど、私らはただただ祈るしか、手を合わせるしかない」。前出の住民女性は自宅付近で濁流にのまれながらも命拾いした。「流された人たちは『自然はおっかないけど、いいものだ。みんな、がんばって生きて』とメッセージを送ってくれているのでは」と思いをはせる。

家族5人の行方が知れない漁師の男性は震災から5年の時を経て、流失した自宅を小谷鳥の高台に新築した。今は日々、ワカメ養殖やウニ、アワビ漁など海の仕事に励む。悲しみは少しでも癒えたのか。家を建てて一区切りのつもりだったけど、とつぶやき、こう続けた。「お骨が見つからない限り、何年経っても（心境は）変わらないねえ」

取材時期＝平成26年10月（野田さん）、27年11月（花崎さん）、28年6月（山崎さん・漁師の男性）

家族５人が行方不明の漁師の男性。
自宅跡地でワカメ養殖の漁具の手入れに精を出す

小谷鳥コミセン跡のほど近く、
海を望む斜面に立つ
「祈りの慰霊碑」。
表面には犠牲者 18 人の
氏名を刻む

避難所で起きたこと ｜ 山田南小

難題に向き合った教員ら

学びやが「野戦病院」に

町で最も多くの児童が通う小学校は、津波に追われた人々と負傷者であふれ、まるで野戦病院のような様相を呈した。避難所になった山田南小学校と武道場の武徳殿、旧さくら幼稚園。隣り合う三つの町立施設にはピーク時に約1170人が身を寄せ、不安な時を過ごした。けが人の応急処置や衛生問題、ストレスが高じての避難者同士のいさかい……。次々と降りかかる難題に関係者はどう立ち向かったのか。南小で行動を共にした学校長と自治組織の代表、医師の３人に聞いた。

山田南小避難所でミーティングを行う医療関係者（平成23年４月３日午後６時５分撮影）。
全国各地の医大や日本赤十字社、自衛隊などから医師団が集った

当時南小校長だった佐賀敏子さん（59）は、校長室で３学期の通知表に校長印を押す作業に追われている最中、激しい揺れに遭った。緑十字の安全旗を持って急いで校庭に出ると、下校途中だった2年生の1クラス約20人があわてて引き返してきた。当日出席していた全児童302人を校庭に集め、点呼した。たびたび余震が襲い、裏手の三陸沿岸道路（山田道路）の高架橋がゆらゆらと大きく揺れた。南小は町指定の緊急避難場所であり、生活の場となる避難所だ。近隣住民の車がスピードを上げて、続々と校庭に入ってきた。

町覆う土ぼこり

午後3時20分過ぎ。なだらかな高台の校庭から町を見下ろすと「黄色い煙」が漂っている。「あれ、何ですか」。周囲の人に聞いても、誰も分からない。程なくして、さっき保護者が引き取っていった児童や大人たちが町の方から大挙して戻ってきた。「津波だー」。黄色い煙は大津波が家屋を巻き込んで破壊した時に生じた土ぼこりだった。校庭は間もなく避難者でごった返した。「体育館を開けて！」。床面にブルーシートを敷き、運動用のマットをありったけ引っ張り出した。

南小から直線距離で東に約200メートル、徒歩5分足らずの位置で泌尿器科・皮膚科を開業する後藤医院。地震の後、院長の後藤尚（たかし）さん（69）が2階で人工透析の装置を点検していると、下水道工事の作業員たちの様子が騒がしい。医院の前をまっすぐ通る通称長崎街道の300メートルほど先の地点、消防団第7分団屯所の近辺で、がれきがじわじわとせり上がるようにこちらに迫ってくるのが見えた。後藤さんをはじめ、事務職員と看護師、患者ら約20人が車で南小に駆け込んだ。がれきは医院の50メートル手前で止まった。

低体温患者続々と

「先生、避難者の診察をお願いします」。後藤さんは役場職員の懇請を受け、医院に引き返して、消毒薬や昇圧剤、簡便な手術道具などを持参。南小の保健室を開放すると、「瞬く間に野戦病院のようになった」（佐賀さん）。津波にのまれ、ずぶぬれになった低体温症の人が一度に30人ほども運ばれてきた。ガタガタと体を震わせるが、温めるものがない。一計を案じた。ビニールの大きなごみ袋にジャージの体操服を入れ、円筒形の反射式ストーブでお湯を沸かして注ぎ、湯たんぽの代用品を作った。それでも間に合わず、医療用の生理食塩水のパックを温めて、タオルでくるみ、患者に使ってもらった。打撲傷や切り傷を負った人も多かった。後藤さんと看護師たちは3日間、不眠不休で診療に当たった。

２日目には被災した町内の内科医と整形外科医の2人も活動に加わり、3月15日ごろからはＪＭＡＴ（日本医師会災害医療チーム）や岩手医科大、国立病院機構、昭和大などの医師団が駐留。1階の保健室を中心に、各教室を、患者の重症度が高い順に隣り合わせで入院病室に割り振った。保健室に薬剤師が常駐する薬局を、2階と3階には新たな診察室や隔離病室も設けた。町中からけが人や急患が集まり、「野戦病院」は精神科も擁する大所帯の「総合病院」へと変遷した。

学校だけの対応に限界

一方、体育館だけで850人が詰

※地図データは震災前のものです
は津波の浸水範囲

「学校は命を助ける場でもあった」と振り返る、
当時の山田南小校長佐賀敏子さん

震災から３日間、不眠不休で避難者の診察に当たった後藤尚さん

川端信作さんは自治組織代表を務め、「在宅避難者」にも気を配った

め掛けた南小では、自治組織の構成が喫緊の課題になっていた。食料や支援物資の分配が不公平だ、トイレが詰まってどうしようもない……。避難者から様々な不満や苦情が一気に寄せられた。

避難者や患者が増え続ける中、学校では旧さくら幼稚園のホールで家族が迎えに来られなかった児童約60人をケア。教職員23人は、そのうち7人が家族や自宅を失うなどの被害を受けながらも、食料や物資の分配、清掃などあらゆる用務を一手に引き受けた。佐賀さんは対応に限界を感じていた。

「学校の職員で最善を尽くしていますが、間に合いません。自治組織を作って問題を解決していきませんか」。震災から3日目の午後、たまりかねた佐賀さんは体育館の避難者たちに拡声器で呼び掛け、リーダーを募った。

学校の苦境を見かねて立ち上がったのが、宮古水産高校の元教員で山田地区長崎の自宅が被災した川端信作さん(77)だ。「みんな自分たちの生活を守るだけで精いっぱい。黙ってるわけにはいかないと思った」。まず衛生面の管理から着手した。体育館は避難者が靴を履いたまま出入りし、風邪や流感が蔓延する恐れがあったため、土足禁止を徹底。入り口に段ボールを敷いて下足を脱ぎ、スリッパに履き替えさせるようにした。

トイレの問題も深刻だった。体育館と校舎のトイレのタンクはすぐに汚物でいっぱいになり、中庭に穴を掘ってテントで目隠しをした簡易トイレを作った。仮設トイレ8基が届くまでの約1週間、避難者が利用した。

赤ちゃんが希望の光に

佐賀さんは「とにかく何とかしなきゃ。学校は教育の場だけじゃなく、地域の皆さんの命を助ける場でもあるんだ」と自らに言い聞かせた。一方、「みんながんばろう」という当初の連帯感のような空気が「だんだん統制が取れなくなってイライラしてきた」のを感じた。川端さんによると、避難所の赤ちゃんたちがむずかるのに対し、若い男性らがたびたび不平を述べることがあった。川端さんは避難者の間でストレスが高じているのは「全体的な問題だ」と認識、こう言って若者をなだめた。

「赤ん坊が泣くのは元気に育つため。山田町では多くの人が津波の犠牲になった。この子たちは山田の明日を築く人材なんだから、温かく面倒を見てあげようよ」

はいはいをしていた赤ちゃんはやがて、つかまり立ちをして歩くようになる。「みんながその子供たちをあやす。殺伐とした環境で、赤ちゃんが育っていく姿を見て、それに関わるのが心の癒やしになったんですね。そういうムードが出てきて、誰も泣き声をうるさいとは言わなくなった」。自宅や家族を失った人たちは、一条の希望の光をそこに見いだしていた。

不遇だった在宅避難者

川端さんが気に掛かったのは、自宅は無事だったものの食料や物資が枯渇して、満足に支援を受けられない「在宅避難者」の存在だ。避難所で炊き出しなどをする際、在宅避難者らが「肩身の狭い思いをしながら」やって来ると、一部に排除しようとする雰囲気があったという。川端さんは「後ろの方になるけど」と言って、同じ列に並ばせ、在宅避難者のことを悪く言う人がいればたしなめた。自宅や親戚の家などで避難生活を送る人たちも困窮した被災者には変わりがなく、今後、災害時に公平に食料などを支給する仕組み作りが必要だ。

避難生活や避難所の運営を通して、関係者が得た教訓や反省とは何か。

医師の後藤さんは、震災当時、指定避難所の南小に水や食料、毛布などの備蓄がほとんどなかったことを問題視する。医院から借り物のシーツ類を持ち出して提供したほどだ。震災後、町は防災拠点や各避難所に防災備蓄倉庫の設置を進め、平成28年度の時点で町内20カ所にある同倉庫に毛布や非常食、居室用パーテーションなどを格納する。

県病被災のダメージ

南小はすぐ近くで開業する後藤さんが避難したことで「偶発的に」医療現場になったといえる。後藤さんは山田地区柳沢の県立山田病院が被災したのが大きな痛手だったとみる。「県病（県立病院）は災害時のノウハウを持っており、（医薬品・医療機器の）物流も県病を通じて動く。当初、われわれの所にはほとんど医療品が来なかった。県病が無事なら問題はないはずだった。県病とわれわれはもっとお互いに連絡を取り合い、連携を密にするべきだった」。災害に備えて「被災の恐れのない場所に地域医療の拠点を設け、様々な機能を集中させることが大切。分散するとやれる範囲も限られてしまう」と後藤さんは指摘する。

大沢地区山谷の仮設診療所で患者を受け入れていた県立山田病院は平成28年9月、山田地区飯岡の高台造成地に移転、開院を果たした。

川端さんは避難所を出てから移り住んだ関谷担い手仮設団地でも自治会長を務める。「津波ではまず逃げること。避難中は助け合いの精神を大事にして、限界を感じたら『てんでんこ』（ばらばら）に。地震や津波を侮っては駄目です」と戒め、自治会では年に2回、津波襲来を想定した避難訓練を行っている。

学校を地域防災の仲間に

佐賀さんは、地域防災で学校が果たす役割についてあらためて考えさせられた。「学校が地域防災の仲間に入り、いざという時に持ち場をしっかり守るために、日ごろから地域との連携を図っておくべきでした」。南小のある山田地区の南西部は住宅街で勤め人が多く、震災でも自然発生的に自助組織の立ち上がった町内のほかの集落ほど、住民同士の関係性が濃密ではない。「例えば、初期対応を学校が、炊き出しは自治会が行うなどの取り決めをあらかじめしておかなければならない地域だった」と反省する。

平成26（2014）年4月に盛岡市立杜陵小学校に転勤した佐賀さんは「内陸での復興教育が震災の風化を防ぐ」と強く感じるようになった。赴任当初、高学年の児童に震災を知っているか尋ねたところ、4割ほどしか手を挙げなかったという。県小学校長会では「横軸連携」と称して、被災地と内陸の学校同士の交流事業を推進。南小は盛岡の青山小と姉妹校関係を結び、相互訪問などを行っている。

盛岡で生まれ育った佐賀さんは、山田での震災体験や子供たちの姿を「離れれば離れるほど、毎日のように」思い出す。「たぶん一生、お墓に入っても忘れられないでしょう」

取材時期＝平成26年10月（川端さん）、27年12月（佐賀さん）、28年6月（後藤さん）

山田南小体育館には最多で850人が避難した
（平成23年3月17日午前9時23分撮影）

インタビュー

古老たちは語る
三つの津波をくぐって

地震が来たら高台に逃げ、物を取りに戻らないこと。

2011 3.11 東日本大震災

〈あの日、孫の男性が経営する田の浜簡易郵便局で預金を下ろし、隣接する自宅に戻った途端、激しい揺れに襲われた〉

すごい地震でした。私たちは大きい地震が揺ると、直ちに津波だと連想します。海のそばにいますから。どのくらいの津波が来るものかっていうのが、いつも頭にあってね。あの時は直感しましたね、これ津波が来るって。下ろしたばかりのお金と預金通帳、それから補聴器の電池とか、そういうものをリュックに入れて、孫の車に乗せられて高台まで行きました。

消防の屯所の上に私の家の土地と2軒の家があり、姉の祝田キミの家に逃げたんです。

私はさらに高台の倉本理さんの家まで歩いて逃げました。もう、限界だなあと思ったら、倉本さんが私を負ぶってくれたんです。倉本さんが庭さ、いす出して毛布を掛けてくれて、ありがたかったです。そして、日暮れになって誰も来ないし、寒くなってきて、はてなと思ってさらに上の方さ上がっていったんです。

〈山道には、町内施設の送迎バスが止まっていた。この後、バスは山林火災の火の手から逃げ回ることになる〉

乗って温めてもらいました。そしたら、次々とずぶ濡れの人も来ました。それで、バスは満員になってます。山道があるので、そこさ、上がって行ったんだども、今度は木の間から火が見えてきてね。バスは何回も移動して、運転手さんも田の浜の地形を知らないから苦労したと思います。私はこの後、祝田の家に先に行って、長女の夫の兄弟も来たったから、そこで一夜を過ごしたんです。

古い家だために、地震が揺るたびにつぶれるかと思って外に飛び出すのす。すると田の浜が燃えてるの。津波で濡れてるはずなのに、何が燃えんだが、本当にはあ、真っ暗な空に火事の炎だけがね。写真で見た東京大空襲みたいだなと思いましたったけど。

津波が来るって直感しました。

〈翌12日は高台の知人の家に地域の被災者と共に1泊、さらに13日には孤立した地区から救助のヘリコプターで脱出し、避難所になった山田高校へ。その後、釜石に住む孫娘の夫婦の家で過ごし、田の浜に戻ったの

中村トキ（なかむら・とき）さん

大正9（1920）年2月、大槌町で海産物の加工業を営む家に生まれる。昭和17（1942）年に田の浜の船主だった久一さん（故人）のもとに嫁いだ。東日本大震災の津波では自宅が全壊し、町内の介護老人保健施設「シーサイドかろ」にいた実姉と大槌町役場勤務の甥を亡くした。現在は浦の浜仮設団地に長女や孫と共に暮らす。短歌結社「歩道岩手の会」の同人で、歌人としても活躍。

は停電が解消した4月になってからだった〉

自宅の木造部分は全部流れて、コンクリート造りの家屋だけが残っているっていうのは聞きましたったけども、初めて見た時は、本当にはあ、辺りはみんながれきで、その中でわが家の2階のテラスの手すりは折れる、屋上に物は上がる、窓は破れる……。軽トラに乗って行って見せられたんだけれども、本当に降りるのも待ちかねるようにして泣きました。自衛隊や警察の方もそばにたくさんいたったけれども、恥ずかしいも何もなくはあ、おいおいって泣きました。破れた窓ガラスの向こうにがれきが見えるんだもの。

〈田の浜から南に2キロ以上離れた船越半島の付け根、浦の浜の介護老人保健施設「シーサイドかろ」にいた実姉が、大槌町役場で震災の対策会議を開いていた町職員の甥が町長らと共に津波にのまれた。浦の浜では、山田湾と船越湾からの二つの津波がぶつかって強大な破壊力が生じたとされ、「かろ」の利用者74人、職員14人が犠牲になった〉

東京大空襲みたいだと思いました。

浦の浜で津波を見た人は、すごかったって言います。津波の夜が明けてから、「かろ」はどうしたんだべなあと思って「かろは？」って聞いたら、「何、2階さもベランダさも、車何台も乗ってる」って言われてはあ、駄目だなあって思ったんです。若い職員の方は本当に、年寄りも同じ命ですけれども、これからという方が亡くなって残念ですね。姉は95歳になっても病院の薬を一切飲んでいませんでした。ぼけもあまり進んでいなくて、当たり前に会話してましたった。

思うと、甥もかわいそうです。3月末が定年でしたね。この間も大槌の役場の跡に涙流してきました。あんな時に会議するなんてね。逃げるのが先だと思うんだけれども。

〈中村さんは、今回の津波で人的被害が拡大したのは人々の心に油断があったのではないかと考えている〉

津波の怖さをよく知っていないと。それというのは、震災の前の年、チリ地震の津波の警報があったんです。大津波警報って、「大」が付いたんですね。私たちもどんな大きなのが来るのかと思って、ちょうどその日は田の浜で演芸会があり、反省会のおやつなんかを作ったのに中止になったし、午前中から逃げました。

ところが、お昼になっても夜になっても津波の気配がないんです。その時の津波は数十センチという観測だったんで、みんな大津波、大津波って騒いだってあの程度しか来ないのかと、翌年の本当の大津波では油断したんじゃないかなあ、残念だなあって思うんですよね。

田の浜で私たちが住んでいた辺り、「下」っていうんです。下にいるのも、逃げるのももう限界になってきました。

警報に慣れて油断していました。

田の浜の自宅跡地で往時をしのぶトキさん。
東日本大震災とチリ地震の津波では背後の通りを上がって高台に逃れた

このように仮設で長く待ってるけど、高台に家が建ったって、私も九十半ばを超えていますので、あといくらも住むか分からない。それでも日が暮れて朝になって、1日だけ（新居に移れるときが）近くなったなあって、それを希望につないで今生きているわけです。

〈「藍ふかき海をへだてて雪晴れし十二神山輝きて見ゆ」。中村さんは町に記録的な大雪の降った平成26（2014）年2月、浦の浜仮設住宅の付近で見た、深い藍色の山田湾と冠雪した十二神山の対比の美しさを詠んだ。この歌は同年4月、短歌結社「歩道岩手の会」の短歌大会で最

「このごろ、やっと海を見られるようになりました。」

〈高賞の天賞に輝いた〉

あれは本当に神々しく見えたんですね。今まで田の浜にいた時は毎日、鯨山を眺めたったのが、今度はこっちに来て山田湾の向こうに十二神山が見える。車に乗せられてカーブを曲がった時、十二神山の雪が輝いて本当に立派だなあと思って、何となく気持ちが明るくなったったのね。津波の後は海を見たくもない気がしましたったけど、このごろ、眺められるようになりました。

〈津波がさらった後の、変わりゆく風景を惜しむこんな歌もある。「防潮堤竣りなばわが家はこの下にありきと人ら永く偲ばん」。無常観があふれる〉

私たちがいた所はもう防潮堤になるんだってです。ここに防潮堤があって、この下にわが家があったったがなあって、みんなが思うのかなあと。それというのも、わが家に本当にいい水が湧いてるんです。その水も埋まってしまうのかなって。

1960 5.24 チリ地震津波

〈田の浜に嫁いで18年、40歳の時にチリ地震津波が来襲した。最大波は午前4時ごろ。気象庁から津波警報は出されず、全くの不意打ちだった。中村さんの婚家に勤めていたいとこが舅に急を知らせに来た〉

私のいとこが「おじいさん、みんな海が変だって騒いでます」って来たったんです。おじいさんが「ヨダ（津波を意味する方言）だべ」ってしゃべって出て行ったから、私も行ったのす。今、（船越湾漁業協同）組合が立って、車が走っている所はあのころ海でした。今堤防が立っている所にコンクリートの護岸があって、すぐ下が渚でね。そこさ、みんな立って、海を見てるんです。そうしたら、水が引けてって、海の底の泥がすっかり見えて、係留してる船がゆらゆら左右に傾くんです。来た、来た、来たってば、また来るのす、水がね。また戻っていって、ずっと田の浜に見えている弁天島の近くまで（水が）行った時、みんなが「今度は来っぞー、逃げろー」ってしゃべってなあす。

私も護岸から家に戻って、隣のお母さんさ、「津波が来やんしたー」って叫んでから、こう出たら、もう水が来たったの。そして、高台までが坂だわけね、そこまで息切らして走ってたら、この坂を上っている時、船だの小屋がどんどん畑さ、流れて。今度流れた田の浜の（船越）漁村センターの辺りを、どんどん上がってきたんです。

大船渡はそのころ大きな被害があったそうですね。田の浜は小屋や何かが流れて、わが家でも海のそばの倉庫が破られて漁具を流したけれども、建物は残ってたったんです。自宅は床下浸水だったと思います。

坂道を走って逃げた時、船だの小屋だのが流されて進むのが速かったんです。ものすごい勢いでした。私たちもやっぱり（実姉の）祝田の所に逃げて、あんまり津波を見なかったんです。もう、逃げるのが先ですから。

時間が朝早かったんです。ワカメの口開け（漁解禁）で、みんな浜さ出てたったんで、早く分かったんですね。あれが夜だったら、本当に地震の揺れもなかったから危なかったんでしょうね。

「揺れもないし、夜だったら危なかったでしょうに。」

チリ地震津波で大きく水が引き、海底があらわになった田の浜の浜辺。通常は、この写真で見える桟橋の脚の中ほどが海面だったという

1933 3.3 昭和三陸津波

〈中村さんは当時13歳。大槌町の中心街でスルメなど海産物の加工製造業を営む生家で、両親ときょうだいの合わせて7人と暮らしていた〉

午前2時40分でうちの時計は止まりましたったね。両親と兄はうちさ残って、私と弟1人、妹3人で逃げたんです。私はきょうだいのうちでは、体が大きかったんです。4月になれば学校に入る一番下の妹をおぶって、今、大槌町の中央公民館が立っている所、あそこの山さ逃げました。

うちの親たちがお前たちは生きろって。うちの本家で定置網やってあったので、網の人たちが泊まってるわけね。私のうちより、ずっと海に近い方さ。うちの父親がその定置網の番屋さ走って行ったら、「何、津波は来ねえもんだ、寝ろ、寝ろ」って、寝るところだったんだって。「こんな地震で寝てられねえもんだが。起きて逃げたんせ（逃げなさい）」ってしゃべって、みんな逃げたのす。翌朝、みんなの家族が安否を尋ねてきて、おかげさまで助かったって喜ばれたってす。

もう何十年も前だから地震の大きさも忘れたけど、津波が来るくらいゆらと揺れて水さ映ったなあす。夜でしたから、寒くてねえ。何着て逃げたったべねえって妹に話したら、丹前を着てたんでないかなと妹は言うんです。たき火をたいて、寒いのとおっかないのでぶるぶる震えました。

親からは地震が揺ったらとにかく津波が来るから逃げるようにと、私たちも小っちゃい時から、教育というか、聞かせられてましたね。その時、うちの母はなあす、こんな津波で逃げるときは囲炉裏の炭火さ、すり鉢をかぶせて逃げるもんだって。火事の予防でしょ。大槌町では昭和8年の津波で火事はなかったんです。

夜が明けてから山を下りて家を見に行ったんです。大槌の、今は（東日本大震災の津波で）流れてないけど、北日本銀行のあった四つ角、あの地震だから大きかったと思いますね。津波が来たのは間もなくでないですか。山さ上がってから、下を見ると水が来てて、提灯の明かりがゆらそこさ、魚が1匹残っていたった。私のうちは浮かんで、向こうのうちさ、半間ぐらいぶつかるように行ってたったのす。平屋の家の押し入れの上の段近くまで水が行きました。

「妹を負ぶって山さ逃げました。」

〈津波の後、当時の石黒英彦・岩手県知事が犠牲者を悼んで復興を願う短歌を詠み、曲が付けられた。「亡霊は千尋の海に鎮もりて栄え行く代の柱たるらむ」「大津浪くぐりてめげぬ雄心もていざ追い進み参い上らまし」の2首。4月、女学校に進学した中村さんはこれらを合唱したという〉

東日本大震災があって、歌を思い出しました。復興の歌は力強いリズム感があっていいですけど、慰霊の歌を歌った時は、魂が千尋の海さ沈んで本当に守ってるんだと子供心に思いましたったね。

〈津波の時、いち早く逃げろと諭した両親からは明治29（1896）年の大津波の話も聞いた〉

旧の端午の節句だったそうです。何かお祝い事があってね、大槌の海岸で花火を上げる予定だったそうです。花火を上げる人たちも津波でさらわれたって聞きましたね。田の浜の中村家でも女性が3人亡くなっています。

生涯で3度の大津波を経験して伝えたいのは、やっぱり、地震が揺ったらすぐ高い所に逃げるということと、忘れ物しても取りさ来てはいけないということですね。

これまで津波の来ない警報に、何十回逃げたか分かりません。だからもう、逃げなくてもいい所に住みたいです。

（平成26年9月取材）

「もう逃げなくてもいい所に住みたいです。」

インタビュー

古老たちは語る
三つの津波をくぐって

水のそばですから、逃げるしかありませんね。

織笠地区を襲った三つの津波を肌で知る
福士勝男さん（右）と妻のリキさん

福士勝男（ふくし・かつお）さん、リキ（りき）さん夫妻

勝男さんは大正９(1920)年11月生まれ。織笠川河口から約500メートル離れた川沿いの家で育ち、農業や漁業、小売業で生計を立ててきた。東日本大震災の津波で自宅が全壊し、織笠内陸の猿神地区の仮設住宅で家族と共に暮らす。妻のリキさんは大正12(1923)年４月、織笠の中野地区の農家に生まれ、昭和23(1948)年に嫁いだ。夫妻で４人の子供を育て上げた。

2011 3.11

東日本大震災

〈勝男さんは地震が発生した時間、毎日の習慣で自宅で昼寝中だった。驚いて飛び起き、防災リュックをしょって台所へ。当時、自宅にはリキさんと長男孝光（たかみつ）さん、四男誠光（せいこう）さんがおり、織笠の根井沢地区に住む次男孝弘（たかひろ）さんも自家用車ですぐ駆けつけた。勝男さんは誠光さんと近くの高台へ、リキさんは孝弘さんの車で山あいの根井沢地区へ避難した〉

リキさん　「母さん、国会が始まってたがえ」って息子（孝光さん）に庭でしゃべられたので、座る前にテレビ付けたら「緊急速報」って入ったの。あら、何が出んだあべって立ち上がったとたんに地震なの。台所が今にも破れそうなの、はあ。板の家で、板が古くなってるからバリバリって。たまげて、はあ、飛び出はった瞬間に腰が抜けてしまって。外、出たっきゃ、向かいのおばあさんが「孝光さん、駄目、駄目、瓦が飛んでは駄目だあが、もっと広場さ、お母様連れてこお」って、お父さん（勝男さん）と2人で引きずられてね。

二番目（の息子）が高台に住んでるんですよ。それがいい塩梅に迎えに来たんです。私が膝が悪いのが分かってるから。（車で）高台さ上がって。「母さん、この車ではちょっと危険だっけえに、車替えっぺす」って、大きい車さ乗り換えたの。ここが日当たりがいいからって止めると、（余震で）その車が浮き上がるようなの。びっくりして、なあどすっぺ（どうしようか）と思ってたら、（いったん車から離れていた）息子がすっ飛んで来て「母さん、立ってられねえぐらいの大地震だあでば」って、おら「おっかねえなあ」ってしゃべってたら、（孝弘さんが）「この車なら大丈夫だから、黙って車にいた方がいい」って。「母さん、津波だ、津波だ。船が流れてきた、田んぼさ」づうんだもん。「見るすか」って言うきゃ、いやあー、震えて見るも何もできないの、ただただ震えて、はあ。

おらが足が悪いために高台の土地を買ってありましたったの。それで家っこが建ってたったから、おじいさん（勝男さん）と末息子はそこさ避難したったの。そしたら息子（孝光さん）が（近くの）鉄道（ＪＲ山田線の線路）さ上がってて、波が上から来たので、おじいさんと弟に向かって「おっきいのが来たー」っておっきな声出したんだそうです。それでたまげて、末息子がおじいさんを連れて逃げました。山へ登りました。

織笠川沿いにあった自宅の跡地で腰を掛ける福士勝男さん

勝男さん　最初の高台までは歩いて逃げました。すぐ近かったから。

リキさん　別々に逃げた方がいいと思ったわけではなかったけど、とっさにそうなってしまいました。

勝男さん　津波が来るのは見ていません。最後に逃げた場所のすぐ下まで来たんですが、上さ上がって見た時はもうすでに下の家の跡はなかったんですよ。大きい向こうの堤防だけ見えて、あとは流れた残骸が引けてくる波に持って行かれるのは見てました。津波が来たところは見ませんし、見えなかったです。音も聞こえなかった。30分ぐらい高台にいて、流れた家を見てがっかりしてしまって、やっぱり動けなかったです。だどもまあ、気を取り直して、コミュニティ（センター）に行き、数日後、そのそばに妹（福士テルさん）の家があったために、そこにいました。

リキさん　末っ子とおじいさんはテルさんのとこで、私たちが孝弘のとこで4カ月住みました。

勝男さん　避難後しばらくしてから、毎日3時にコミュニティで支援物資を配布するという放送（行政防災無線）が始まり、頂くようになりました。

「飛び出した瞬間に腰が抜けてしまって。」

「家が流れ、がっかりして動けませんでした。」

1960 5.24

チリ地震津波

〈その日はワカメ漁の口開け（解禁）で、勝男さんは浜に向かったが、漁が中止になったような気配だったという〉

勝男さん　ワカメの口開けが中止になって、今のような（漁協の）放送がなかったから、なんで中止になったべかと思って引き返しました。家に帰るともう夜が明けたったから、すぐ床に入らないで、そのまま横になってたら、「津波だ」っていう声がして……。

リキさん　昆金吾さんという人のおかげでした。金吾さんがワカメの口開けのために早々（浜に）行ったそうです。その方が皆様さ、おっきな声で、声のありっきりで堤防を、「津波だ、津波だ」ってどこまでも叫んで行ったんですよ。私がね、そ

の朝、竈（分家）の田植えですので、4時に起きました。金吾様が騒いだ途端に、「あら、津波だって言ってたが、地震もねえがな」って思ったけど、おらえ（うち）の竈も、これ津波だってみんなが学校さ避難しとったがえって、今、金吾様が騒いでいったがえって。

たまげて外に出ると家の前で、ぶつぶつぶつと、排水路の周辺から水が出てんので。波が1回来てったがって言って、大きな下水付けてるのでね、下水見たっきゃ、やっぱり水がありました。やっぱり1回来てったんだ。それから私たちは落合さんづうとこの裏山がありますのでね、そこさみんな逃げました。あの付近の方は全部。

〈自宅には福士さん夫妻と子供4人の一家全員がいた。急を知らせる昆さんの叫びを聞いて布団を梁の上に上げ、裏山に避難したのは午前4時半ごろだったという〉

「津波って聞いたけど、地震もねえがな。」

「家は壊れなかったけど、中身は流されました。」

リキさん　私が4時だために起きたんですよ、竈さ行くべと思ってね。その時、（昆さんが）叫んで行ったので、ありゃ、これ津波さ出たがっていうことで、子供らをみんな起こして、もよわせて（身支度させて）上さ上がったのね。まだ、末っ子が3歳か4歳で、おばあさんが負ぶって逃げたんだから。

勝男さん　私の家まで津波は来ました。高さ1メートル半ぐらいだな。そこまで水が入りましたよ。金吾さんが走って騒いだために、それをみんな聞いて、気付いて裏山さ逃げました。そこに、近辺の人たちは全部はあ、避難しました。てんでんに高い所に。

リキさん　（通称）和村（織笠第9地割の一角）から手前の方々が30人ぐらいいたんでないですかね。裏山からすっかり見えるんですよ、津波がね。速かったんですね、おら初めて見たんだから。

勝男さん　だどもやっぱり、遠くから来た津波だからあんまり威力はなかった。水は上までたくさんに上がったども、家が壊れるようなことはなかったす。

リキさん　うちなんか古家で石の上に柱が乗ってんだけども流れないで、中の物だけが流れました。

勝男さん　津波がとにかく弱かったっていうがね、遠くから来たから。東日本大震災の津波の強さには例えられません。力はなかったですよ。もうはあ、津波が弱くなってきてるからたくさんに水が来ても、家はびくともしなかったですよ。昔の家は石の上に柱が立ってても、杉皮で屋根が敷かって、石が乗っている重みがあったために流れなかったと思います。平屋の家でしたが。

リキさん　中の物は全部はあ、何もなかったです。布団だけは助かりましたがね。夕方になってから、家に戻りました。うちはきれいでしたが、和村の方（の家々）は毎日掃除でした、泥で。うちはもう床板もはあ、洗ったようにきれい。汚れはないんです。戸がないから中はきれいに流されました。床はそのままで流されないども。置いたものは流された。畳もはあ、ないです。その時はなに布団があっから。板はきれいだし、ある程度の掃除して、応急手当てして、その晩から家で寝ました。布団は津波が来る前に、梁さ上げました。竈の父さん（勝男さんの実弟）が来たおかげで、はしごをかけてどんどん上げました。

織笠の町中に侵入するチリ地震津波の濁流。かなりの流速があるように見える

チリ地震津波で
水没した織笠の集落を眺める人々

1933 3.3

昭和三陸津波

〈当時は2人とも十代前半で、結婚前。勝男さんは織笠の自宅に軽い浸水があり、リキさんは実家が内陸の中野で被害を受けなかった〉

勝男さん　地震が来たのは記憶にないですが、やっぱりチリ地震津波と同じで、津波が来たと聞いてから逃げたんですよ。当時は放送も何もねえ時で、確かめてから初めて津波だっつうことになってるから。親たちは多分津波を見てから逃げたんだと思いますが、私は津波は見ませんでした。早く逃げろって言われて逃げたから。後でうちに帰ってきてから、ああ、ここまで水が来たんだなっていうのは分かったども、津波そのものは見ませんでした。まあ、見さ行けって。んだども、家が流れたあでばって帰ってきやんしたった。亡くなった人はないです。その後、また店やったですから。

「チリ地震津波よりずっと小さかったと思います。」

リキさん　私は10歳か11歳でね、家のおじいさんが、この地震で「縦揺れとか横揺れだあ、この地震ではただでねえが、津波が来っこったが」って。田の浜に、商店をやってる親戚が住んでいるのんです。それさ、母親と兄と姉の3人で早く手伝いさ行けって。（中野の）家は大きいけどねえ、すごい揺れだったあの。だっけえ、津波が来んが、早く田の浜る気もなかったし。

私は高台にあった親戚の家に逃げました。今、コミュニティの下の方に家が建っておりますが、その辺でござんす。そこに一晩泊まって。それからすぐ下がってきたら、津波が来た痕があって、水が床さ上がったか上がらなかった程度だったために、すぐその日からうちで住むようになった。チリ津波よりずっと小さい津波だったと今では思っていますよ。東日本大震災の津波は本当に大きかった。今の堤防があれば、チリ津波も、昭和の津波も町に入らなかったと思いますよ。

〈三つの大きな津波を経験した教訓について、夫妻は「とにかく逃げること」と口をそろえる〉

勝男さん　地震があったら、まず逃げることですな。

リキさん　私たちは一番危険な所にいますから、逃げるよりほかありませんがね。物さこだわることはできませんが。すぐはあ、もう川沿いですから。危険を感じてるから。

勝男さん　チリ地震津波の経験で、まだここまでは来なかったなあと思って避難しないでいた人たちが犠牲になりましたよ。

（平成27年5月取材）

※福士勝男さんは平成28年7月、95歳で逝去されました。心より哀悼の意を表します。

「この揺れでは津波が来っこったがって。」

インタビュー

古老たちは語る
三つの津波をくぐって

家は無事でも、収入源の漁具を全部流した。

鈴木勝男（すずき・かつお）さん

昭和2(1927)年4月、大沢生まれ。漁師の叔父の家で育つ。戦時中に徴用工や予科練を経て、戦後は主にイカ釣りなどの漁業に従事。脳内出血を患いながらも80歳まで現役で漁師を続ける。昭和三陸津波(1933年)は自宅付近で、チリ地震津波(1960年)は漁場の北海道釧路で遭遇した。東日本大震災の津波では長女が小型漁船を沖に避難させた。

2011 3.11

東日本大震災

〈当時83歳。脳内出血の後遺症があり、自宅2階で休んでいた時に揺れに襲われた。長女の山内敏子さんと男子高校生の孫も在宅していた〉

すごかったです。ドーンと、突き上げるような音。これではもうはあ、昭和8年の津波どころではないと思った。すげえのが来んなあと感じたんです、直感的に。それ以前の十勝沖地震などで、いつも船を避難させていた。でも、これでは船出しても危ないなあと思って、「やめろ」って言うべしって、もよって（身支度をして）行ったら、（娘が）息子（孫）と2人して出てった後だった。ワカメやらアワビ、ウニを採る3・7トンのボートで、漁船とすれば小さい方。養殖専用だ。

もよってここ（自宅前の道）で立ってたんです。（海が）どうなったかなあ、どのくらい潮が引けるかなあと思って防波堤のある辺りを見ていた。チリ津波は釧路で遭って、むしろ釧路で潮が引くのを見たのね。その後、家さ戻って聞いたら、大した水が引いて、あそこの先の岩が山のように見えたというんだ。そんなに引くのかなあと思ってここから見てたら、水が戻ってきたんです。戻ってきた、戻ってきたと。なーに、止まらないじゃないですか。その防波堤の越え方がすごかった。

防波堤の広い所から、ダーッと高

「ナイアガラの滝みたいに水が落ちてきた。」

くナイアガラの滝のように水が落ちてきた。手前を見ると、お寺（南陽寺）の入り口までがれきが来た。寒くて、歩くのに足が鈍かった。ふるさとセンターさ行ってみたらもう、見られたもんでないですよ。みんながれきになって、船がその上に乗ったり、ひっくり返ったりしている船もあった。それではあ、これで娘はどうなったかなと心配になった。居合わせた人たちに聞いても、はっきりした様子は分からない。そのうち親戚の若い衆が、出てくのは見たって言うんだ。

鈴木さんの自宅前から望む山田湾。
防波堤を「ナイアガラの滝のように」落ちる津波が見えた

夜になって（一時的に避難した）親戚の家からふるさとセンターまで、（娘の安否を確かめようと）2、3回歩いた。それでも分からなくて、次の朝行ったね。その晩は眠られなかったなあ、心配で。大沢公園の高台から双眼鏡で沖を眺める人があって、おらい（わが家）の船を見てくれってしゃべったんです。俺の船は特別な違った型で、見たらすぐ分かる。そして、いたって。なんか黒いのが見えたって。飼ってた黒い犬も乗せていったんだ。それで何ぼか安心した。

「引け目感じて炊き出しに並びました。」

〈敏子さんは、勝男さんが「津波のときはここに逃げろ」と日ごろ言い聞かせてきた沖合に船を避難させていた。翌12日の午後にはいち早く帰還。高台で津波の届かなかった自宅で避難生活を始めた〉

電気は止まった、水道も止まった。水はこの水（敷地から出ている沢水）を（町の人に）使わせたのす。この水で助かりました、みんなくみに来た人は。避難所になった小学校とふるさとセンターさ、水を配った。自衛隊が来るまでここの水を使った。

朝夕になれば、家を流されなかった人たちがびんをしょってくみさ来た。

家が流れなかったといったって大変。金になる漁具を全部流したわけだ。そうしているうちに、支援物資のお米をもらって、俺たちはそれを自分で炊いて食べた。家のない人たちは炊き出しさ行ったども。避難所に炊き出し、もらいさ行くのももうはあ、なんづうだかねえ、気分がよくないです。（家が）流れないでいて。引け目感じてもらいに行ってました。そして、家が流れた人に何もしてやれねえ。今でも心残りがあります。

1960 5.24

チリ地震津波

〈サケマスのはえ縄漁で北海道釧路に出漁し、漁獲を釧路港に水揚げしようという時に津波が来た〉

その日は朝4時からの水揚げだった。3時に起きて船で洗濯してたんです。変だなあ、洗濯している1時間かそこらのうちに、五、六十センチ、下がったり上がったりしたんです、船がね。「船頭、親分、これ津波が来んがよ」って言いました。低くなって潮が引けて船底が海底に付くっていうと、転がるんですよ、船が。市場の上屋の柱と船の柱さ、綱取って（結んで）転ばないようにした。そうしているうちにどんどん潮が引けていって。前にいた船はそんなのしなかったわけだ。ゴロンと転んでしまった。

次に水が出てきたら、みんなして出刃（包丁）持ってってはあ、（手

「潮が引けて、船がゴロンと転んだ。」

で綱を）ほどいてるってとこでねえさ、切っても逃げねばねえけって、戻ってきた。ほどいて全速で（沖に）出はったんですよ。後は考えずに、ただ逃げるって頭じゃないですか。どういう状態になるかっていうのは分からなかったね。市場の前は海底が見えたったんです。

　水深は6メートルぐらいあったんでないかな。釧路の港の中は堤防があって狭い。堤防の口まで走っていくのに釧路川があって、その前の年まで川沿いに市場があったった。堤防の口を出たら途端に次の波が来たんですよ。1メートル以上の落差があるんです。東日本大震災のような波でなく、水位が上がったり下がったりだった。流れはあったけれども、大きな波としては来なかった。

チリ地震津波で大きく潮が引いた大沢の海岸。桟橋の橋脚が全て露出し、漁船の底が海底に付いているのが分かる

「チリで地震があったのは知らなかった。」

〈津波はチリ地震から23時間後に日本沿岸に到達したが、警報は出ていなかった〉

　潮が引いたんで、津波が来るって分かった。その前に十勝沖だの、金華山沖で大きな地震が起きて、小さな津波はあったんです。その経験があるために感づいた。チリで地震があったのは知らなかった。知らないども、海面が下がったために、これは津波が来ると。

　そして、朝の4時で寝てる時間帯ですから、（日本で）地震がなくて（津波が）来たからこれははあ、（山田町の）人は水が来てたまげて、びっくりして逃げたんでないかなと思ったったんだども、（その日は）ちょうどワカメの解禁だったんですよ。解禁になれば、人は（早朝から浜に出ていて海の異状に気付くので）けがはないと思ったわけだ。やはりそうだった。

　釧路で水揚げをして働いてから、山田に戻ったのは7月ころか。宮古の無線局で様子が分かったので、それほど心配はしなかった。町はちゃんとしていた。北浜の親戚の船が田んぼの奥の方まで流されていってあったったども、それは戻っておりました。混乱してる感じもなかった。戻ってすぐイカ釣りやってたから。ただ、養殖のいかだがいくらかずれたり、なんだりしてた。

1933 3.3

昭和三陸津波

〈当時5歳。現在の大沢漁港の漁協近く、海岸から50メートルほど離れた叔父夫妻の家に住んでいた。3月3日、村中が寝静まっていた午前2時半ごろ。「地震だー、起きろ」。家人の叫び声で目を覚ました〉

　戸棚から茶碗が落ちて、壊れる音がしたった。起きたら、外さ出るなって（言われた）。昔は杉皮をふいた屋根に石が上がってたんですよ。それが落ちるから出るなって。大きな地震が来ると戸が開かなくなるっけに、戸は開けたんですよ。囲炉裏に火を燃やして当たって。当たってるうちに、明治の津波を経験したおじいさんやおばあさんが、炉端さば、大きなすり鉢を持ってきた。何するんだって聞いたら、それを（消火のため）火さかぶせて逃げるって。

　そして、おじいさん、この辺りでは「じっつぃ」って呼ぶが、じっつぃが海岸さ行って、「津波だ」って叫んだら逃げろって言われたんです。だっけえに、おしっこがしたかったんです。ちょうど、海岸さ下がる道路の脇に下水があった。そこさ出て、用を足してたら、じっつぃの声がした。「津波だ」。そのままはあ、坂道を走ったんです。

　そっちの方の通りに、石垣が高く組まった家があって、そこさ行って待ってた。そして、通りを眺めてたら、「勝男がいねえ」って提灯つけて、妹をしょったおばあさんたちが、ぞろぞろって上がって来てたんです。みんなで（大沢）小学校（現・大沢公園）まで上がった。津波だって騒いだおじいさんが、近くから薪（まき）を持ってきて、昔は天皇陛下と皇后陛下の写真を納めた「奉安殿」ってあったったんです。奉安殿のあった広場で薪を燃やした。そしたらみんな集まってきた。オサント（妊婦）さんだのを一番先に逃がせて。それから津波が二番波だの三番波だのって来て、家の壊れる音が聞こえましたった。

　潮が引けてった時に、旧正月だったから、お供えだなんだあったんですよ。お菓子を持ってきて、みんなして分けた。その火でお供えの丸い餅を焼いて、集まった人たちが食べやんした。

〈勝男さんの記憶だと、夜が明けると大沢の浜に「2艇の潜水艦」が入ってきた。水兵が降りてきて、津波で倒壊した家屋を解体、その木材を用いて応急の仮設住宅を建設したという。津波の翌年に発行された『岩手県昭和震災史』によると、3月4日午前、海軍の横須賀鎮守府（神奈川県横須賀市）と大湊要港部（青森県むつ市）から救援物資を積んだ艦船9隻が、大船渡や釜石、山田、大槌、宮古など沿岸の各港に入港。水兵らがモーターボートで上陸し、救護活動に当たった。勝男さんが見たのはこれだと思われる〉

「何度も波が来て、家の壊れる音が聞こえた。」

　自分のバッタ（メンコ）があっかなあと思って、家まで下がって行った。俺の家と右手の方の、その時店やってる家がありやんした。2軒の家が道路をまたいでこっちの向かいの家まで転んでた。水兵さんが上がってきて、みんなバラバラにほごした（解体した）。記憶にあるのは、5、6軒向こうの家。屋根と柱だけ残って、後は流されていた。

　水兵は家をバラバラとほごしてすぐ出ていった。丁寧にほごして、ほごした家で4間ぐらいの小屋だね、仮設を造って、そこで住みなさいと。2、3年はいたんでないかな。そしてから家建てて。その時、津波後に初めて電気がついた。それでも、結局生活が悪い人たちは電気が通ってもつけなかった。ついてもなに、15燭光（しょっこう）（明るさの単位）ぐらいのもんだ。

　街灯もついたんですよ。海岸道と本道路さ。本道路は暗い電球だども、（高さが）高いんです。海岸の電球は40ワットだった。低くて明るいのす。家で（声を出して）本を読んでると、「うるせえ、海岸の電球の下さ行って読め」って騒がれたり何だりしたもんだ。

「廃材で作った仮設小屋で2、3年暮らした。」

　津波の後はバッタやおもちゃを拾って歩いた。一軒隣の向かいの家の前は広いのす。そこさ、たんすとかそういう小っちゃい物が流れてきた。昭和8年には今度のようながれきは見なかったなあす。

（平成27年4月取材）

昭和三陸津波では陸海軍のほか、近隣町村からも救援隊が駆け付けた。写真は旧山口村（現宮古市）の青年団。
山田漁港付近の川向町で撮影されたものと思われる

インタビュー

古老たちは語る
三つの津波をくぐって

生き延びたんじゃなく、生かされたんです。

2011 3.11

東日本大震災

〈境田町の自宅で、所属の書道研究会が発行する月刊誌を塾生9人に配るために、表紙に各人の名前を墨で書き入れた後、縫物をしようと文机に向かったとたん、激しい揺れに襲われた。「早く逃げろ！」。書棚から落ちた本を元に戻していると、近所の民生委員白土盛（しらとさかり）さんが叫びながら玄関口に入ってきた〉

私は津波が来るとは思わなかった。地震で家がつぶれると思ったけど、全然、逃げる気はしなかった。逃げては危ないと思ったの。それよりは家と共に人生を終ろうと覚悟した。

白土さんは「津波が来る、早く逃げろ」って。それで「津波」っていう言葉が頭に入った。一緒に外に出たわけす。持ち物は、いつも印鑑と通帳を小っちゃい袋に入れて置いてるの。それ、つかんで逃げたの。それで国道（45号）に出ましたでしょ。白土さんは国道を横断して左に行った。自分の家は左だし、一人暮らし（の高齢者）はまだいっぱいいるわけだ。私はＪＲ山田線の踏切を渡ってまっすぐ高台に行った。

行く間に人一人に会わないの。すでにみんな上がっていて。三田地の高台って分かる？　あそこ行ったらね、ものすごい人なの。見たことのない人がたくさんいる。もう、数え切れないの。そしてみんなが沖を見てるわけ。私も一緒になって沖を見た。ものすごいね、波が来て。高台ですもん、あそこ。すっかり見えるの。

盛さんはね、高台さ行かないで町を行ったのす、国道を。私が一人だけ行った、高台さ。私は足が弱いからす、一生懸命行ったわけだが、10分以上かかったでしょうね。人一人に会わないっていうのはす、相当時間が経っていたんですねえ。

「あまりの揺れにもう最期だと覚悟しました。」

〈梅木さんによると、白土さんは午後3時ごろに梅木さん宅を訪ねた。白土さんは後に遺体で発見された。独居の高齢者らに避難を呼び掛けている最中に津波に巻き込まれたとみられる〉

津波が来たのは、高台に着いて5分もしないんじゃないかと思いますね。すっかり見たわけす。波がね、来ますでしょ。そうすると、家が将棋倒しにダーッと。引く波にガラガラガラ、引く波にガラガラガラガラと何度も流されていく。

そしてね、ずっと奥に堤防がありますでしょ。波が引けてくと底が見えるの。そして漁船がね、いっぱい着いてたんですよ。それがひっくり返るわけ。船底が赤いでしょ。それが幾つも、プカプカプカプカ（浮いていた）。そしてまた津波が来て、引き波でいなくなるの、その船が。何回もそれを繰り返してるうちに、沖の方の突堤の付け根が見えたの。

海がもうね、本当に盛り上がってきて。津波はよく黒いっていわれますけど、私には黒くは見えなかった。黒ずんではいるけれど、ものすごい勢いで来て、それが町並みを、家をのみ込んだ。安西（製材所）ってありますでしょ、あそこにす、（国道を挟んで）郵便局もあってね。安西のこっち（北）側には家がいっぱいだ。それがすっかり将棋倒しに倒れる。

「海が盛り上がって町をのみ込んだの。」

〈津波は複数の方向から何度も来たように見えたという〉

波は一所だけでなくね、こっちから来たといえば、あっちから来る、そっちからも来る。船がひっくり返るのが一艘（そう）や二艘じゃないの、何ぼも。突堤に船がつながってるのが見えたんです。波があっちからもこっちからも来て、引いていく。それを何回も繰り返すわけです。そして、突堤の下がすっかり見えた、砂が。海底が何もなく見えたの。そうかと思えば、また（波が）来るでしょ。すごかったです。

〈梅木さんはその日のうちに高台から山田高校に避難。そこで書道教室の塾生で当時高校2年生の山﨑宥美（ひろみ）さんから一冊のノートとボールペンをポンと手渡される。梅木さんはノートを日記帳にした。山﨑さんは「いつも字を書いている先生だから、紙がないと落ち着かないのではないかと思った」と当時を振り返る〉

何か書かなきゃいけないというより、何のことはないのす。ただ書いたわけ、はあ。書かずにいられないわけす。宥美ちゃんからノートを渡されなかったら、ただぼうぜんと過ごしましたね。

さかのぼって書いているようにも思えるけれど、とにかくこれはその日のうちに書いてますね。

余震があるためにストーブもつけられない。知らない人たち同士で足と足を寄せて、温め合ったわけ。後のためにと思って、みんなにノートにサインしてもらったんですよ。

翌日、おにぎりが1個、いや、2個だったかしら。私たちは驚きました。何千人でしょ。その人たちにどこの誰がこうして炊き出しをしてくださっているのか、知らないわけです。いったい誰がしてくれたのかしら。豊間根地区の方々ですよね。

日が経つにつれて、豚汁のようなものも来たり、コーヒーも来たり。そうすると私が年寄りなので、そばにいる人たちが「いい、いい、座ってて」って、私にコーヒーを運んでくれたり、飲み終わると「いい、いい、私が洗ってあげる」って持って行ったり。みんな本当に親切でした。知らない若い人もね。全然どこの誰かは分からないんです。それに感動しました、ただただ。

「避難所のみんなは本当に親切でした。」

梅木さんは避難所の山田高校で、津波の様子や避難中の出来事を丹念にノートに書きつづった

〈震災を経て、生かされた命を精いっぱい生きたいという〉

私はねえ、命が生かされた。盛さんが私を迎えに来なかったら、どうなっていたか。私は盛さんの孫である塾生2人に手紙を宛てて、あなた方のおじいさんのおかげで命が助か

梅木仲子（うめき・なかこ）さん

大正11（1922）年生まれ。山田町の中心街、旧張場（はりば）町（現在の川向町付近）で育つ。10代で両親、弟と死別し、東京や大槌町での生活を経て、山田町で食堂を経営。盛岡市で暮らしていた昭和49（1974）年に書道の師匠に弟子入りし、60歳の時から山田町境田町の自宅で書道教室と着付け教室を開く。東日本大震災の津波で自宅が全壊し、娘２人のいる関東に移住した。短歌結社でも活動し、震災前から書きためた作品で歌集づくりに取り組んでいる。

ったって書いたんです。生かされた。生きているんじゃない。今でもそうです。生かされたんだから、その訳があると思うの。そして、今まで書いた短歌を歌集にするために、一生懸命書き写して推敲しています。書きながらね、やっと頭が澄んでくるの。

歌集を作ろうと思ったのは、やっぱり震災がきっかけですね。何か御礼しなくちゃいけないと思ったの。

1960 5.24 チリ地震津波

〈梅木さんは当時、大槌町の中心部から内陸に約20キロ離れた金沢地区の嫁ぎ先におり、直接的な被害は免れた。山田町の実家は半壊し、同級生2人が勤めていた役場を見舞いに行ったという〉

1933 3.3 昭和三陸津波

〈当時満10歳で旧張場町の自宅にいた。3月3日午前2時半過ぎの熟睡中に襲った地震。土木請負業に従事し、消防団で活躍していた父は、住民に避難を呼び掛けるために真っ先に家を飛び出した〉

真夜中にものすごい地震でね。津波が来るって言われてもね、寒いでしょ。うちの母は「何、津波なんて」っていったような感じであまり気に留めない。だけど、父親は消防だから、家のこと顧みないではあ、出ちゃうのす。それで親子3人、母と小学5年生の私、3年生の弟で、八幡様（山田八幡宮）へ逃げました。私は長靴をはいてす。暗い所を一生懸命逃げて、社務所の前に人がいっぱい集まってね。寒いのでたき火しましたっけ。そして、当たりましたった。

父親が言うには、高い所に上がって津波を見たそうです。波がおっきく寄せてくるのを見たって言ってましたった。私たちはとにかく夜を明かして、旧三日町、今の中央町の「びはん」（スーパー）のある辺りへ行った。あの辺は津波が来なかったんです。あそこにお寺（龍昌寺）に行く通り（寺小路）があります。その近くに遠野から引っ越してきた人たちで、時計屋があったんです。その人たちが私の家を本家のようにしていた。親子4人でその家に厄介になったんです。

実家は半壊ですから、住まれないわけ。畳の上に3尺（約1メートル）ぐらい水が上がって、泥が分厚く積もってしまって。その前の晩、親戚に子供が生まれて、母がお祝いに行ってミカンをもらってきた。泥の上にミカンが散らばっていたのを今も覚えています。畳も全部捨てる。床板も全部取り替えなくちゃならない。そしてお金はない。

避難した時計屋は6畳間と4畳半しかないんですよ。そこに私たちが4人も行ってね、違和感なく、家族みたいにされたの。よくしてくれたと思いますよ。今でも思い出す。時計屋は夫婦と子供1人。それと職人がおりましたね。本当の他人ですけどね、山田に来て、私のうちに草鞋を脱いだって言うの。それで草鞋本家っていうんでしょう。昔の人はそういうことを大事にしたんですね。

（平成26年12月取材）

「八幡様に人がいっぱい避難してね。」

チリ地震津波の影響で逆巻く西川（川向町）

昭和三陸津波で流され、海中に没したと思われる建物。撮影場所は境田町付近か